

エルデの王は迷宮で夢を見るか？

一般通過あせんちゅ

一般エルデの王（Lv・713）は迷宮で夢を見るか？  
なお、基本的には地上でラニ様と遊んでいる模様

※多分、主人公最強系になると思います

# 目次

褪せ人	1
眠れる王 <small>私の王</small>	9
コボルト	17
白兔	25
正体不明 <small>アンノウン</small>	33
オラリオの路地裏	41
お誘い	47
怪物祭 <small>モンスターフェア</small>	53
冒険者ミストルティン	63
迷宮探索 <small>ダンジョン</small>	71
闘技場 <small>コロシウム</small>	79

小さな違和感

取引

霊馬

リヴィラの街

怪しい冒険者

ロキ・ファミリア

アイテム作製

道半ばの英雄

給仕

魂

闇派閥

条件契約

強者と弱者

天敵

超越存在

異常者

謎

遭遇

猛者

高み

神殺しの矢

冒険者

英雄街道



## 褪せ人

勢いで書いた

当方、続きなど全く思いついておりませんのでご了承を

---

「うわっ!？」

彼にとってその出会いは唐突なものだった。【ヘスティア・ファミリア】に所属する唯一の眷属であるベル・クラネルは、ダンジョンの曲がり角の先に突っ立っていた存在に腰を抜かして尻餅をついた。ぶつかると直前に踏みとどまっていたため、当該の人物との接触はなかったが、主神からも認められる善性を持つ彼はすぐに相手に謝った。

「ご、ごめんなさい！」

「……貴公、神の気配を感じるぞ」

銅色の全身装備の中から聞こえてきたくぐもった声に、ベル・クラネルは困惑し

た。神の気配と言われても、彼にはなんの心当たりもなかったが、彼の背中に刻まれた恩恵は、目の前の人物に反応して僅かな熱を発していた。

「いや、貴公は神の祝福を受けているのか……ならばなにも言うまい。貴公にも祝福が見えているのだろうか？」

「しゅ、祝福？」

「言葉にする必要はない。貴公は英雄となるべき存在である……私の様にはなるな」  
ベル・クラネルにとってその言葉は殆ど理解できるものではなかった。しかし、最後の言葉が悲しみから生み出されているものなのは理解できた。それは天性の優しさから来るものなのかはわからなかったが、横を通り過ぎる騎士をただ見送ることしかできなかったベル・クラネルは、英雄となるべき存在という言葉だけが心のうちに渦巻いていた。

その後、唐突にして突拍子もない出会いを経て悩みながら迷宮を歩くベル・クラネルは、風を纏う金色の少女と出会い、運命が加速していく。

「……威厳のある王様ロールプレイやめようかな」

「辞めておけ。身の丈以上の役割など背負う意味もあるまい」

決して治安がいいとは言い切れない街、オラリオの路地裏に佇む銅色の騎士然とした女は、ため息と共に弱音を吐いた。独り言として呟いた言葉に反応したのは、虚空から現れた雪の様な魔女であった。

「私の王よ。以前にも言ったはずだ……お前に王の真似事は無理だ」

「……」

「そう恨みがましい目を向けるな。楽観主義で刹那主義であるお前に、王など勤まらない」

雪の魔女『ラニ』の言葉を受けて、騎士は明らかに落ち込んでいた。伴侶であるはずの魔女にすらロールプレイを否定された彼女は、強大な力を持つはずの坩堝の騎士の姿のままいじけたようにその場に座り込んだ。最初の王、ゴッドフレイに仕

え、原初の黄金樹が持つ生命の坩堝の力を宿した強力な騎士が着込む鎧を身に着けながら、力ない人間のように路地裏に座り込む姿に、ラニは呆れたようなため息を吐いた。

ラニの目の前に座り込む坩堝の騎士オルドビス（のコスプレをした変人）は、狭間の地を駆け抜けたエルデの王である。ルーンを求めて彷徨う怪物、黄金樹の化身とも言える精霊、生物の枠を超えた力を持つ竜、力を振りかざすデミゴッド、同朋であるはずの狂った褪せ人、その全てを例外なく屠ったエルデの王は、ただ人だった。狂人と呼ぶには理性があり、強者と呼ぶには余裕がなく、武人と呼ぶには卑劣であり、騎士と呼ぶには志がなく、悪逆と呼ぶには純真である。故に、彼女は王と呼ぶにはあまりにも器が足りなかった。しかし、彼女と戦ったエルデの王は言った。力こそ王の故、と。ならばこそ、彼女は器でなくともエルデの王であり、冷たき律の時代を導く、魔女の伴侶なのだ。

「宿は探しておけ私の王よ……伴侶とのひと時が外では風情もなからう」

「……探しとく」

世界を敵に回しても守り抜くと決めた伴侶の言葉に頷きながら、エルデの王は立

ち上がった。坩堝の鎧がルーンとして分解されて彼女の身体の内へと溶け込んでいくのと同時に、顔を隠すように黒き刃のマントを羽織った。粒子として消え行くラニは、その装束に微妙な表情を残していたが、何も言うことなく虚空へと消えていった。

「腹は減らないなあ……エルデンリングもないから導きもないし……どうしよっかなあ……」

王と呼ぶにはあまりにも俗的な言葉を吐きながらオラリオの裏路地を進む彼女は、力ない足取りのまま闇の中へと消えていった。

彼女は褪せ人と呼ぶには余りにもただ人だった。何故ならば、そもそも彼女は正確には褪せ人ではないのだから。褪せ人とは本来、破碎戦争前に瞳が褪せたと言わ

れて狭間の地から追放された者たちであり、彼女が狭間の地を駆け巡っていた時にいた褪せ人はその子孫たちが基本である。しかし、彼女は追放された本人でもなければ、子孫でもない。彼女は全く違う世界から連れてこられた平和を享受していた男である。何故、褪せ人でもない彼が導きによって狭間の地を訪れたのかは誰も知らない。

結果的に彼は彼女になって褪せ人として修羅の世界に放り込まれても、その地に溢れていた者たちを屠り続けた。褪せ人を導く二本指、その上に存在するとされる大いなる意志の求めた最高の人材と言えるだろう。欠点を上げるとすれば、惚れた女の為に大いなる意志すらも裏切って黄金の律を消し去ったことだけである。

狭間の地を駆け抜け、幾度も訪れた死によって薄れてしまった平和な世界に生きていた記憶を思い起こしながらも、彼女は伴侶であるラニがゆっくりと休める場所を探してオラリオを歩き続けるのであった。

---

平和な世界↓狭間の地(何故かTS)↓オラリオ(伴侶付き)のあせんちゅ(なお、

既に平和な世界の記憶など殆ど消し飛んだ模様  
(転生タグってやっぱり、いらいますかね?)



# 眠れる王私の

ラニ様を書きたかった

「あー……この廃教会とかいいんじゃないかな？」

オラリオをぶらぶらと歩いていたら褪せ人は、誰が見ても人は住んでなさそうな教会を発見していた。なにせ教会自体は崩れていないが、周囲の建物がボロボロに崩れているのだ。しかも周囲に人の気配すらもなく、草木が生い茂っている。完全に人が住んでいなさそうな割に、しっかりと雨風を凌げそうな場所を発見できたことに安堵の息を吐いた。

「狭間の地にある教会はどれも酷かったからなあ」

狭間の地に点在するマリカ教会や童餐教会は、どれも天井が全く存在していなかった。壁も穴だらけでまともに教会としての形を保っていたのは美しく作られた彫像だけ。彼女の知っている教会は雨風凌ぐこともできず、たまに誰かが侵入して

きて命を狙ってくる場所である。

ようやく腰を落ち着ける場所へとやってきた彼女は、教会の端っこに座り込んだ。黄金樹のない世界では祝福など存在しないため、安全に座って休めるところなどないと思っていたが、そもそもオラリオは治安が悪いと言っても狭間の地程ではない。旅をしていた最中でも、不戦の誓いが存在した円卓以外ではまともに休むこともできなかった褪せ人は、人気のない廃教会で目を閉じた。大いなる意志の身勝手な理由で走らされ、他の褪せ人と違って不死であった彼女にとっては、随分と久しぶりの睡眠だった。

「たっだいま……て、誰もいないんだけどね」

褪せ人が目を閉じて意識を飛ばしてからしばらくした後、麗しい黒い髪を二つ伸ばした女が廃教会へとやってきた。手には謎の食物を手に、上機嫌な足取りのまま廃教会の奥の扉に手をかけたところで、端っこで眠っているその存在に気が付いた。

「……人？」

真っ黒なフードに真っ黒なローブで眠っている存在に、女性と呼ぶには少し幼い女は近づいた。彼女の名はヘスティア。褪せ人が迷宮で出会った少年の主神であ

り、この魔教会を拠点にしている【ヘスティア・ファミリア】の主である。根っからの善神であるヘスティアは、もしかしたら怪我でもしているのではないかと思いつながら眠っている褪せ人に近づいて、手を伸ばしたところで止まった。

「私の王に触れる気か？」

「っ!? い、いつの間につ!?」

触れる直前に聞こえてきた声に振り向いたヘスティアは、真っ白なローブに魔術師然とした大きな帽子を被っている存在に驚き声を上げたが、目の前の存在が人間ではなく人形であることに気が付いて目を見開いた。

「に、人形が動いて喋ってる？」

「……不躰な視線だな。神たるお前が何故、私の王に触れようとする」

「わ、私の王？」

ヘスティアの頭は混乱で満ちていた。いつも通りバイトから帰ってきたら、住んでいる教会に知らない人が眠っていると思えば、心配して手を伸ばすと全身から静かな怒気を放つ薄水色の喋る人形が背後に立っていたのだ。

「まあいい……どのみち神など碌な存在ではない。消しておくか」

「ちょ、ちょっと待ってーっ!? 確かに下界したに降りてきてる神はロクデナシばかりだけど、ボクはそうでもないよ!」

「知らん。神など全て同じだ」

目の前にいる存在はどうやら神に対して途轍もない嫌悪感があるらしい。ヘスティアは今までの会話で大体を理解した。動いて喋る人形が生物なのかは理解できないが、目を見て話せば下界の人間たちが嘘をついているのかどうかを見分けることができる神の目に、目の前の存在は引っかけかかっていない。正確に言えば、神にも嘘かどうか判断することができない。

「えっ? ど、どうということだい?」

嘘を見分けられない相手ということとは、同存在である神以外には存在しない。しかし、ヘスティアは神の世界でも人形の身体をした神など見たことがない。

ラニは目の前の神が慌てている様子を冷たい目で見降ろしながら、四本ある腕の一本を動かして魔力を集中させていた。冷たい星と月の魔女たるラニの扱う魔法は、カーリア王家の魔術である。腕の上に浮かび上がる冷たい青色の刃を目にして、ヘスティアは悲鳴を上げていたが、その背後にいる褪せ人がゆっくりと起き上

がってヘスティアの肩に手を置き、自分の方へと引き寄せた。

「……………なにをしているのか、聞いておこう。私の王よ」

「悪い神じゃなさそうだし、まだ何もしてない」

「違う。何故、私以外の女を腕に抱いているのか……………その言い訳を聞こうと言っている」

「あ……………」

「え？ え？ そういう関係？」

ヘスティアを腕の中に抱き、外敵から守るようになっている褪せ人を見て、ラニは表情が消えて冷たい殺気を放っていた。ヘスティアはラニの言葉を聞いて、二人の顔を何回か往復してから顔を赤らめた後、褪せ人は一先ずヘスティアを放した。

「まさかこんなボロボロな教会に住んでいる人がいるとは思わなかった。謝らせてくれ」

「ボロ……………確かに人が住んでいるとは思えない……………」

褪せ人はラニから露骨に目を逸らしながら、ヘスティアに対して謝っていた。ヘスティアとしては自分の愛する眷属と過ごしている愛の巣なのだが、外から見れば

人が住んでいると思えない廃墟であるのは間違いない。

「すまない。私たちはもう行くよ」

「う、うん……君も気を付けて……って、流石にボクの心が痛むよ。好きなだけいてくれて……も？」

ヘスティアは根っからの善神であり、住む場所がないという事情を聞いてそのまま追い出すような精神はしていない。故にヘスティアはラニのことを怪しみながらも滞在許可を出そうとして振り向いた瞬間、固まった。なにせ、さっきまでそこにいて会話していたはずの存在が二人とも消えていたのだ。まさか幽霊だったのではと思い始めたヘスティアは、顔を青くしながら地下室へと入っていった。

ここでヘスティアはあることに気が付いていなかった。ラニという理解不能な存在を前に困惑していた状況に、追加で殺気を向けられたから仕方のないことではあったのだが、彼女が『私の王』と呼んでいた人物もまた、嘘かどうか判断できない存在であったことに気付くことなく思考の隅に追いやったのだ。

「良かったの？ 善神だと言うのなら住まいを提供でもしてくれそうなものだけ  
ど」

「遠慮しておくよ……ラニに嫉妬されると敵わないからね」

「……口を慎め」

「痛い」

ラニは少しだけ頬を染めながら褪せ人の、自らの伴侶の腕を抓った。

(褪せ人に名前は)ないです

物語進めにくいからそのうち付けます



## コボルト

今度こそ人のいない廃屋を見つけた褪せ人は、そこにおいてあった椅子にラニを座らせ、自分は床に座り込んでいた。

「ラニ、私の名前どうしよう」

「エルデの王では不便か？」

「自己紹介にはあんまり……使いにくくない？　この地の人にはエルデがなにかわからないでしょ？」

狭間の地では意思疎通が取れる相手が少数しかいなかったために、あまり問題にもならなかったが、人と接する機会が多くなるオラリオでは、名前があったほうが便利であるのは間違いない。

「ふむ……私が名前を決めてやろう」

「エルデの王だから、偽名はマリカとか……すいません、二度と言いません」

月の女王ラニ、その本気の殺意が籠った視線を向けられたエルデの王はすぐに謝った。彼女にとって女王マリカの名は禁句に近いものである。くだらない冗談を

言う伴侶に呆れたため息を吐きながら、ラニは少し考えるような仕草を見せた後、薄く笑みを浮かべながら口を開いた。

「お前はこれからミストルテインと名乗ればいい」

「わ、わかりました」

その名前に込められた意味をエルデの王は知らない。それでも、薄く笑みを浮かべているラニの表情は、なにか嫌らしいことを思いついた時と同じである。

「でも、ミストルテインだと長いよ」

「ではミスト、私はそろそろ眠るぞ」

「自然に略した……」

「私はお前のことを名前で呼ぶことは金輪際ないぞ。偽名を名乗るのは私以外にしておけ」

「それは別にいいけど」

ミストルテインと名付けられたエルデの王は、ラニがゆっくりと自分の方に向かってくる姿を見ながら考え事をしていたが、いきなり腕の中に突撃してきたラニにそのまま押し潰された。

「ラニ?」

「……お前は私の下で寝ている」

最後に言葉を残して反応しなくなったラニに苦笑しながら、ミストは抜け殻の様に力を無くしたラニの身体を抱きしめて目を閉じた。ラニの身体は人形であり、熱を持つことはない。しかし、ミストは新たに与えられた名前を心の内で言葉にするだけで、不思議と身体が温まっていた。心地の言い身体の熱を感じながら目を閉じたミストは、意識を夢に持っていかれる直前に、唇へ何かが触れた感覚を味わった。

翌日、寝た場所の関係で身体の節々に痛みを感じながら起き上がったミストは、流石に眠る場所にはなにかを敷いておいた方がいいかと考えていた。身体の上で寝ていたはずのラニは既に姿を消している。いついなくなったのかは知らなくとも、

ミストはラニが持つ律の力は身近に感じていた。

「今度こそダンジョン探索でもしてみるかな」

「行くのか？」

「いたの？」

「私は常にいる」

ラニがいらないと思いついていたミストは、唐突に聞こえてきたラニの声に少し驚きながらも、常に傍に居ると言われて嬉しそうな表情を浮かべていた。ラニは咳ばらいを一つしてから、ミストの前に手をかざした。

「これって……」

「祝福、のようなものだ。お前は既に女王マリカの祝福も、黄金樹の導きも失っている……お前が両方とも消したのだから当たり前だがな」

廃屋の真ん中に生まれた祝福は、ミストが褪せ人として狭間の地を走り回っていた時に何度も利用した祝福によく似ていた。黄金樹ではなく、月の女王ラニのもたらず祝福は冷たい水色をしていた。

「お前に死なれると困る。だからという訳ではないが……死んでも死なせん」

「ありがと」

ミストは、狭間の地に幾人も存在した褪せ人の中でも異端中の異端である。なにせ彼女は不死を体現した存在なのだ。厳密に言えば、彼女の不死は死なないのではなく、死んでも元の形で蘇るのである。たとえ重力魔法によって押し潰されようが、ダンジョンの罠によって細切れにされようが、刃物で真つ二つにされようが、彼女は死んだ瞬間に最後に訪れた祝福から蘇る。

「私の孤独の道についてくると言ったのだ……途中で放り出す真似はさせんぞ、私の王よ」

「任せて」

ラニとしてはあまり彼女をこうした律の力で縛り付けるようなことはしたくなかったが、伴侶を守る為ならば許容範囲内である。

祝福によって憂いを無くしたミストは、意気揚々とダンジョンの攻略へと乗り出した。再び坩堝の騎士、オルドビスのコスプレを始めたエルデの王は、重厚な鎧の音を鳴らしながらダンジョンの上層を彷徨っていた。

「……チャリオットは走ってない？」

地下に向かって続いていくダンジョンに対してあまりいい思い出がないミストは、周辺をつぶさに観察してチャリオットの車輪が転がる用の通路がないことを確認していた。英雄墓で何度も引き潰された記憶を思い出しながら、ゆっくりとダンジョンを進むミストの前に、壁からコボルトが2匹湧き出した。壁から生まれたコボルトは、ミストを認識すると鋭い爪を光らせてミストへと襲い掛かった。

大仰な鎧を着込んでいるとはいえ、無防備な姿のまま突っ立っているミストの命を刈り取ろうとしたコボルトは、己の横を通り過ぎて行った青い光へと目を向けた。己と共にダンジョンへと生まれ落ちたもう一体のコボルトが、身体を残して頭だけが消し飛んでいた。

「脆いなあ……」

襲い掛かろうとした相手の手には、いつの間にか青い光で作られた大きな弓があった。既に矢は構えられており、コボルトが咄嗟に逃走を始めた瞬間にコボルトの左半身を消し飛ばした。残った右半身だけで言うように逃げようとするコボルトを見て、ミストは首を傾げた。

「怪物なのに恐怖心があるのかな？」

彼女が放った『ローレッタの大弓』はラニが扱うカーリア王家の魔術であり、その名の通り王家親衛騎士であったローレッタが最も得意としていた魔術である。

魔力の大弓による一射で完全に戦意を喪失させたコボルトを見て、ミストは興味なさげに左手の杖を掲げた。ラニの母親である満月の女王レナラの使っていた魔術王笏である『カーリアの王笏』から、青白い剣が一つ浮かび上がる。

「さようなら」

王家の魔術騎士が扱う基本の魔術『魔術の輝剣』によって無慈悲に頭を撃ち抜かれたコボルトを横目に、ミストはため息を吐いた。

---

あせんちゅの名前は「ミストルテイン」にしておきました

基本はミストと呼称していきます

バルドルを殺したヤドリギです（神殺しの皮肉付き）

評価欄がいつの間にか赤色になっているのに気が付いて戦々恐々としていたので

すが、橙色になって少し安心しました(小心)

それでも評価と感想お待ちしております

## 白兔

そろそろ連載に切り替えようか検討中です

「やッ！」

ベル・クラネルは現在、ダンジョン2階層でナイフを振るっていた。相対するゴブリンの首を断ち切り、背後にいたもう1匹のゴブリンに刃を向ける。人間へと敵意を向けて迫るゴブリンを前にしても、ベル・クラネルは冷静な表情をしていた。

「相手の動きをしっかりと見て……叩き切る！」

『ギョオッ!?!』

突き出された爪を左に避け、その勢いそのまま脇腹にナイフを当てて滑らせる。鮮血を散らしながら、ゴブリンは痛みを怯む。その隙を狙って、狡猾な白兔は体重を乗せてゴブリンの首にナイフを突き刺した。神の恩恵を受けた人間は、その時点で

ゴブリンやコボルトを殺すには不足ない力を得ることになる。それでも、冒険者ベル・クラネルは自らの担当者であるエイナ・チュールの言いつけ通り、冒険しないことを心掛ける。

「ふう……」

ゴブリン二体を危なげなく倒したベルは、ナイフを逆手に持って倒したゴブリンから魔石を抉りだした。手の平に乗る爪くらいの大きさしかない魔石だが、これを集めるだけでお金が入るのが冒険者という仕事である。命をかけているだけあり、働いて得られる金はそれなりに多い方だ。

「いい手際だったよ」

「あ、はい、どうも……え？」

「どうかしたかい？」

ダンジョン内でモンスター討伐の手際を、馬鹿にされずに褒められることがあるのかと思いつながら振り向いたベルは、そこにいた坩堝の騎士に目を見開いた。彼が自らの憧憬「アイズ・ヴァレンシュタイン」に出会う少し前に、ダンジョンで出会った姿と全く同じである。あの時はかけられた言葉だけが頭の中に残っていたが、ベ

ルは改めてその人物を頭のとっぺんから足のつま先まで観察して息を呑んだ。

「あ、あの……上級冒険者の方、ですか？」

「上級？ 冒険者には階級があるのか？」

「そこからですか!？」

ダンジョンに潜り、明らかに強そうな鎧を着込んでいるにもかかわらず、冒険者の仕組みすらも理解していない目の前の存在に、ベルは混乱していた。突然の出会いに困惑するベル・クラネルと、目を細めて未来の英雄を見つめるミストルティンを。ダンジョンは待ってはくれない。

「あ、モンスター！」

「……少年、君は何匹までいける？」

一斉に壁から9匹生まれたゴブリンを見て、ベルは息を呑んだ。同時にかけられた声に対して、全部倒せると口にしようとしてから、口を閉じた。

「……5匹程度までなら」

「そうか。なら私が4匹受け持とう」

彼我の戦力差を冷静に分析したベルは、6匹を相手にすればたちまち囲まれて

しまうことを察していた。5匹程度までなら、初撃で一体を屠れば問題ない。ナイフを構えるベルを見て、薄く笑みを浮かべたミストは、ゴブリンが二人を捕捉したのを確認してから魔術を発動させた。

「行きます！」

「後ろ5匹を任せる」

「はい！」

目の前を駆け抜けていくベルを見ながら、ミストはカーリアの王笏を媒介に『ローレッタの絶技』を発動させる。親衛騎士ローレッタが最も得意とした魔術『ローレッタの大弓』を研鑽したものであるそれは、同時に4つの矢を放つことができる魔術である。

一発でコボルトを消し飛ばす威力を見せた『ローレッタの大弓』の完全上位互換である魔術は、走るベル・クラネルの横を通り過ぎて、ベルへと襲い掛かろうとしていた4匹のゴブリンを同時に消し飛ばした。

「やあッ！」

『ギユアッ!?!』

同朋を一瞬で4匹殺されたゴブリンが足並みを乱したところに、新米冒険者が襲い掛かる。不意打ちに1匹の喉を搔っ捌いたナイフを逆手に持ち、動揺しているもう1匹の目にナイフを突き刺す。

「急所をすっかり狙っているね。案外、戦い馴れている」

動揺していたゴブリンたちも、突っ込んできた小柄の冒険者を見て一斉に襲い掛かったが、ベルは敏捷性に優れた冒険者であるため、ゴブリン程度の攻撃を避けることなど訳ないことである。片目を奪われたゴブリンの死角に入り込み、喉を切り裂いたベルは、残りの3匹を見つめながらゆっくりとナイフを構えた。銅色の鎧を着込んだ謎の冒険者は、最初の魔法の様な一撃以外に動くつもりはないらしく、既に杖を構えることもせずにベル・クラネルを観察していた。

「……僕は英雄になるんだ。こんな所で苦戦してられない！」

「お疲れ、少年」

「あ、はい……ありがとうございます」

ゴブリンを片付けた後も、ベルと共にダンジョンを巡ったミストは、目の前にいる少年には英雄としての素質があることを見抜いていた。自分の様な泥臭い卑怯者の勝利者とは違う、人々から存在を渴望される輝かしい英雄の子供を目にして、ミストは目を細めた。

「強いん、ですね」

「ん？ それは場数の違いかな……少年、君はいつか私を凌駕していくさ」  
「で、できるといいなと思います」

お世辞無しでベル・クラネルのことを英雄だと見込んでいるミストとは裏腹に、ベルはミストの圧倒的なまでの力に感嘆していた。自分が許容できる以上の集団が現れた瞬間に、魔力で生み出された大弓を扱って敵を消し飛ばす姿は、ベル・クラネルが夢想する英雄の姿に他ならない。

「あ、名前を教えてくださいませんか？」

「名前？ ああ……私はミストルティン、ミストと呼んでくれ」

「ミストさん、ですね。僕はベル——ベル・クラネルです」

「ベル・クラネル、その名前を覚えておこう」

「ありがとうございます——ヒョェ!？」

憧れるような目でミストを見つめていたベルは、相手をかっこいい鎧を着こなす英雄の様な男性だと思っていたが、兜を取って出てきたミストの素顔は紛れもない女性であった。お世辞無しに美人だと思う金髪の女性に対して、しどろもどろになりながらミストにお礼を言ってから、ダンジョンの入り口を飛び出してギルドへと向かって走って行った。

「……急ぎの用事かな？」

「お前は本当に愚かだな」

事情もわからずに首を傾げるミストに、背後に現れたラニが呆れたようなため息を吐いた。

評価と感想頂けると嬉しいです

## ア ン ノ ウ ン 正体不明

いつも誤字報告ありがとうございます  
とても助かっています

「え？」

ダンジョンで出会ったミストルティンという女性の情報を聞くために、ギルドへと訪れていたベル・クラネルは、向かいに座っているハーフェルフのギルド受付の言葉に上手く返事ができなかった。茶髪のハーフェルフであり、冒険者ベル・クラネルの担当者であるエイナ・チュールの言葉はベルには上手く理解できなかったのだ。

「……ベル君、その人とは本当にダンジョンで出会ったのね？」

「は、はい。間違いないですけど……どういうことですか？」

険しい表情でベルの話聞いていたエイナは、一度ため息を吐いてから資料を取り出した。そこには冒険者登録された人間の名前がちらちらと並べられている。名前の上に線が引かれている者は冒険者ではなくなった、あるいはその命を落としたかのどちらかである。

「ここには今、オラリオの冒険者ギルドに登録されている全ての冒険者の名前が記されているわ」

「名前、ですか」

「名前だけだから、所属ファミリアもレベルも性別すら載ってないわよ」

見せられた資料は何枚も積み重なっていて、ベルが全ての名前に目を通すことはできなかった。しかし、エイナが何を言いたいのかだけはベルにも理解できていた。「そのミストルテインという人は、少なくともギルドが認知している冒険者ではないの」

「で、でも……あの人はサポーターなんかじゃないですよ?」

「サポーター、ね……オラリオにいるサポーターの殆どがしっかり神フアルナの恩恵を持っている冒険者登録された人間。つまり、サポーターもこの中には載っているの」

「じゃ、じゃああの人は……」

ベルの震えたような声にゆっくりと頷いたエイナは、自身の予測を口にした。

「ベル君が出会った『ミストルテイン』という人物。ギルドに登録されていない神の恩恵を与えられた人間と考えるのが妥当よ」

その言葉にベル・クラネルは息を呑んだ。オラリオの地下に存在するダンジョンに挑むために、必ずしも冒険者登録をする必要がある訳ではない。ただ、登録すればギルドの講習として知識を得られ、魔石を換金するにもギルドに入入りする必要がある以上、余計なトラブルを生まないために冒険者登録はほぼ必須となっている。「ベル君の言っていることが本当なら、Lv・2に到達していてもおかしくない実力者。秘匿されているとなると、色々問題だわ」

「……そうですね」

ベル・クラネル個人としては、ダンジョンで出会ったあの金髪の騎士が自分の存在を隠している冒険者にはとても思えなかった。ダンジョンを堂々と歩き、襲い掛かってくるモンスターを蹴散らす姿は、彼が憧憬を抱く少女と似たような姿であった。

「一応、容姿を細かく聞いてもいいかしら？」

「……はい」

「ふふ、安心してベル君。君を助けてくれた人を罰するとか、そういう訳じゃないんだから」

実際、レベルアップした眷属を秘匿することはギルド的にはグレーゾーンだが、そもそも最初から冒険者登録されていない人間ならばレベルアップの報告をする必要もない。ルールの抜け道を使ったような術だが、全てのファミリアに対して中立であるギルドが明確な違反をしていない人間を罰することはできない。

「銅色って言えばいいんですかね……そんな色をした騎士みたいな鎧を全身に着ていて、兜を取ったら金髪に灰色の目をしてました」

「金髪に灰色の目、銅色の騎士風ね。それ以外は？ 使っていた武器とか」

「武器……」

エイナの言葉によってベルの頭に浮かんできたのは、銀色の細い杖と、ゴブリンやコボルトを一撃で消し飛ばした青い大弓の魔法であった。それをそのまま言葉にしたベルは、直後に固まったエイナの姿を見て自分がなにか変なことを言っ

まったのではと慌てていた。

「な、なんでもないよ、なんでも……そ、そうだ！ ベル君はダンジョンから帰ってきたんだし、ステイタスを更新してもらおうといいと思うよ」

「は、はい……え？」

「こっちはもう大丈夫だから。気を付けてね」

急に態度が妖しくなったエイナに首を傾げながらも、ベルは言われた通りに【ヘステイア・ファミア】のホームへと向かっていった。

「魔法も扱う非登録者、か。上に報告した方がいいかなあ……」

担当している冒険者であるベル・クラネルには罰することはないと行ってしまっただが、その者がオラリオで活動する闇派閥イツイルスの疑いが晴れない以上、エイナは完全にその人物を信用することはできない。しかし、ベル・クラネルの命を助けながら、彼の成長を全く邪魔しようとしなかったことからエイナ個人としては善性を信じたかった。

「……ギルドの換金って冒険者じゃないとできないのかな」

ベル・クラネルと共にダンジョンを駆けていたミストは、少量の魔石を手にしなからギルドの前に立っていた。オールドビスのコスプレ装備を脱ぎ、黒き刃の装束を身にまとっているミストは、ギルドの受付と幾つか話しながら換金している冒険者たちを眺めていた。

「冒険者を統括しているのならば、できないのではないか？」

「やっぱりそうかな？」

「……この街の治安ならば幾らでも闇商人がいるだろう」

「あ、そっか」

ラニの言葉に納得したミストは、資料を抱えたまま歩く茶髪のエルフとすれ違いながら裏路地へと入っていった。

評価と感想頂けると嬉しいです



## オラリオの路地裏

そろそろ本格的にプロット組んで、連載として書きたいと思います

怪しげな黒いフードを被ったままオラリオの路地裏を歩くミストは、現在モンスターの核である魔石を買い取ってくれそうな商人を探していた。当然、探している相手は正規の商売人ではない。狭間の地で殺し合いや裏切合いをしてきたミストにとって、なにかしでかさなければ命を狙ってくることはない闇商人など、危険な相手ですらない。

「……そこのお方。魔石をこれ見よがしに手の中で転がしてどうしました？」

「買い取ってもらえないかと思ってね」

「隠さない人ですね」

人気が一切なかった路地裏で、突然扉を開けて現れた人物に対して、ミストは動

揺ることなく魔石を見せた。ダンジョンの上層で相手したモンスターの魔石なため、大きさは小指ほどもないが、問題はそこではない。

「もっと大きな魔石ならギルドに隠れて買い取ってもいいんですけどね……」

「大きな魔石か。それは深く潜ればいいのか？」

「下に潜るほど、モンスターが強くなるかわりに魔石も大きくなる。知らないんですかい？」

「オラリオに来たばかりだね」

ギルドに通さずに魔石を売りたいということは、指名手配されているか以前にオラリオを永久追放されたような人物であると、商人は考えた。当然、そんな相手と取引をすればデメリットは遥かに大きいが、もし目の前の怪しい人物が深層クラスの魔石を持ってこられると言うのなら、デメリットを補うことができるメリットとなる。

「……いいでしょう。最低でも35層以降の魔石を持ってきていただけると約束してくださいのなら、ギルド取引価格の6割程度で買い取りますよ」

「それでいいよ」

ギルドを通せないが故に安めに買い叩こうと思って値段を提示したが、相手は交渉にも乗らずに即答で領いた。それは相手がそれほど多くの金額を求めていないこととの表れであり、ただ単に魔石を売りたいだけなのだ。商人は無理矢理納得した。「モンスターを倒すとドロップアイテムを低確率で落とす場合がありますが、それらも売って頂いた時の市場価格6割で買い取りましょう」

「ドロップアイテム、そんなものも存在するのか。お願いするね」

予想通り即答で領いた相手に、商人は笑みを抑えきれなかった。モンスターのドロップアイテムにはかなりの金額で売れる稀なアイテムも多い。そんなものが市場価格の六割で手に入れば、差し引いた残りの4割は商人の懐に全て入ることになる。裏で闇派閥イツイルスとも繋がっている商人は、短期間で大量のドロップアイテムを売って怪しまれなくなければ、闇派閥の連中に売り渡して儲けることもできる。

「今日のところはその小さな魔石を適正価格で買い取りましょう」

「ありがとうございます。君はいつもここにいるのかい？」

「いえ……ですが、こちら辺には私が雇った者が何人かいますから、この裏路地に貴方がその恰好で入れば私のもとへと案内させますよ」

闇派閥とも繋がっている商人は、居場所を特定されるわけにはいかないため、多くの仮拠点を街中に持っていた。ギルドが正確に把握している訳ではない地上の迷宮「ダイダロス通り」を中心として活動している闇商人だが、この日は闇派閥に属する冒険者と接触する為にギルドの近くまで来ていたのだ。そこにとんだ儲け話が転がり込んできたと、商人はほくそ笑んでいた。

「では、これから御贔屓にお願いしますね」  
「親切にありがとうね」

商人と別れて裏路地を再び歩き始めたミストは、背後に現れたラニへと視線を向けた。

「その金で何を買う気だ」

「柔らかそうな毛布と壊れにくそうな椅子」

「……そうか」

武器収集家でもあるミストが、また新しい武器でも買うつもりなのかとと思っていたラニは、予想とは違う物の名前を出されてほんの少し言い淀んだ。

「それなりに便利な家にしたら、本を買いたいな。この世界がどんな成り立ちで

きているのかを知りたい」

「それがいいだろう。だが、確か35階層以降だけだったか？」

「ドロップアイテムとやらは上層でも買ってくれるらしいよ」

「そう多くは落ちんだろう。だからこそ上層でも買い取ると言ったのだ」

ラニとしても、ギルドを通してしっかりと適正価格で売るべきとは全く考えていない。それでも、35階層以降へと潜るにはそれなりに時間がかかることもラニは予想していた。必然的に廃屋でゆったりと過ごす時間が減ってしまうのが、ラニの不満点である。

「ラニが作ってくれる祝福に移動すれば問題ないんじゃない？」

「……そう上手いくといいがな」

ダンジョンそのものは、ラニとしても非常に興味深い存在ではあるのだが、自らの伴侶であるミストルテインと比べればたいしたものではない。自らをいい様に使うとした大いなる意志も、大いなる意志の傀儡である二本指も存在しないオラリオで、人の届かない月と夜の律を持つラニにとって最も大切な存在である己の伴侶が無事なのであれば、それ以外がどうなろうが関係ない。

「ベル・クラネルも気になるし、やっぱりしばらくダンジョン探索がメインかな」  
「好きにすればいい。もうお前を縛る黄金律は存在しない」

言いたいことだけ言ったラニは、その姿を光として空間に消えていった。伴侶の不器用ながら優しさを感じさせる言葉に、ミストは笑みを浮かべたまま路地裏から廃屋へと向かって歩いて行った。

---

評価と感想頂けると嬉しいです

## お誘い

闇商人との取引を始めて数日後、ギルドの裏路地から闇商人の手引きでダイダロス通りまで歩いてきたミストは、先日相対した格好のまま再び商人と対面していた。

「……これは？」

「潜ってきた」

机の上に乱雑に置かれた魔石とドロップアイテムを見て、商人は自分の背中を汗が流れていくのを感じていた。闇派閥イッイルスからの情報で、数多くのドロップアイテムや深層に湧き出るモンスターイッイルスの魔石を知っている商人は、目の前に乱雑に置かれているガラクタの如き山が、深層域のものであると理解できてしまっていた。

（初めて出会ったのは2、3日前だぞ。ということとは、目の前のこいつはたった3日程度で深層まで行って、この数のモンスターを蹂躪して無傷で帰ってきたってか？ そんなこと……猛者おうじゃでも）

オラリオに来たばかりと言っていた人物が持ってきたとは思えないアイテム群を前に固まっていた商人は、なんとか作り笑いを浮かべて目の前の人物を見つめた。

「……確かに契約内容通りのものです。魔石は適正価格の6割ほどで買い取らせていただき、ドロップアイテムは実際に私が売った時についた売値の6割でよろしいですね？」

「それでいいよ」

これほどのアイテムを手に入れながらダンジョンに対して全くの無知識。つまり、相手はダンジョンで襲い来る理不尽の全てを事前知識無しで全て粉碎したのだ。幾らか金蔓にしてから、必要なくなつた後に始末しておこうと考えていた商人だが、彼は目の前の相手を闇派閥や都市最強の二大ファミリアよりも恐ろしい者であると同様にして、有用であると取り入ろうと考えを切り替えた。

「これほど多くの魔石を、いきなり納品してくださるのならば、次回からは適正価格の8割程度で買い取りましょうか？」

「いいのかい？ 君の取り分が少なくなってしまうよ？」

当然、ミストは商人が裏取引にしても魔石の価格をかなり少なめに見積もっていることぐらい気が付いている。商人も、気付かれていることを知りながら、未だに気が付いていない猿芝居を続けているのだ。ただ、商人はミストを恐れ、ミストは

何に対しても恐れを持っていない、という単純な話である。

「私は商人ですから。貴方様の実力を考えて未来への投資とするのですよ」

「へえ……別にいいけど。邪魔したら消すだけだから」

ミストは、この時初めて商人に対して戦士としての側面を見せた。武器も構えず、身体を動かしている訳ではないが、さっきまでと違い今は襲い掛かれる前にカーリアの魔術を放つことができる。明確に殺気と言えりほどの意識は向けていないが、商人にはミストの言葉が嘘には聞こえなかった。

（とんでもない化け物に話しかけちゃったらしいな……だが、庇護下に入れるのならば怪物の方が好都合だ）

闇派閥とも通じることで近年、急速に商売規模を広げている自分のことが、ギルドやオラリオの治安維持をしている【ガネーシャ・ファミリア】に知られてしまうかもしれない未来が存在する。そうなった時に、目の前の人物は秩序よりも利害を取る。商人は確信していた。

「これからも御鼻屑に、と言いました。貴方様の邪魔はいたしませんよ」

「そう」

会話しながら用意していた魔石の六割分の代金を手渡した商人に対して、ミストは興味なさ気にその場を離れた。

「金がいっぱいだね。いつそのこともうちよつと稼いで、家買った方が良かったかも？」

「人気のない廃屋の方が私は好みだがな」

「じゃあ今のままでいいか」

元々、人の寄りつけないカーリア王家の館を盾に、自らの魔術師塔から出てくることのなかったラニにとって、人が多いオラリオの住宅街に住むくらいならば周囲が廃墟の廃屋に静かに佇んでいる方が性に合っている。

「内装は相談しながらね」

「本だけで充分だ」

「ん？ ラニ、もうすぐお祭りがあるらしいよ」

まとまった金を手に入れたことで廃屋の壊れていた壁と屋根を修理したミストは、端っこに置いてある椅子に座りながら紙を見ていた。オラリオの歴史やダンジョン、冒険者などの知識を得るために本を読んでいたラニは、伴侶の声を聞いて目線を上げた。

「怪物祭だって……なにをするのかな？」

「【ガネーシャ・ファミリア】とやらがダンジョンのモンスターを捕獲、オラリオ内にある闘技場でモンスターを調教する様子タイムを娯楽として見せる、と書かれていた」

「おー……」

まだ本を買ってそれほど時間が経っていないにもかかわらず、しっかりと知識として吸収しているさまを見て、ミストは感心していた。狭間の地で幾多のデミゴツドを打ち砕いてきたエルデの王だが、彼女の基本的な戦略は死なないことを利用した、勝てるまで繰り返すゴリ押しである。ミストの知能が低い訳ではないが、カーリア王家のデミゴツドとして生まれ、黄金律に選ばれた神人たるラニとは比べるべ

くもない。

「それで、その祭りがどうかしたのか」

「楽しそうだから、ラニも一緒に見て回らない？」

「……………まあ、いいだろう」

ミストの言葉を聞き、頭の中では断る言い訳が瞬時に複数浮かび上がってきたラニは、それらを全て思考の彼方へと投げ捨て、己の伴侶たるミストとのデートを選択した。そんな一瞬の逡巡など気付きもしなかったミストは、てっきり断られると思っていたデートの誘いに、ラニがしっかりと乗ってくれたことに嬉しそうな笑みを浮かべていた。

評価と感想頂けると嬉しいです

## 怪物祭

いつも誤字報告ありがとうございます

どれだけ頑張っても誤字がなくならないのは、地味に落ち込みますけど……

「……不思議な魅力だ」

「お前は相変わらずだな」

モンスターフィリア

怪物祭が行われようとしている中、人波から外れた露店で謎の食べ物を食べているミストは、シンプルで変な工夫などにもされてはいないはずだが、病みつきになりそうな味に感心していた。横でラニが溜息を吐きながら、視線はミストが持っている食べ物から露店に掲げられている看板の文字へと移った。

「ジャガ丸くん？ 何故食べ物にくんを付ける」

「意味はわからないけど、この小豆クリーム味……なんとなくいける味だ」

人類の進化を見たと言わんばかりにジャガ丸くんを食すミストに呆れているラニは、周囲から向けられる視線など気にせずミストの手にあるジャガ丸くんを手を取って食べた。

「……………ラニって何か食べられたんだ」

「ふ……食べられないと言った覚えはない」

神秘の力で作られたラニの人形としての身体で、食事が行えるなどとは全く考えていなかったミストは、ラニが自分と食事してくれる喜びに震えていた。

「もっと一緒ににか食べよう！」

「いらん。そもそも消化機能はついていない」

「え……………」

「私はお前が食べている姿を見るだけで充分だ」

ラニの言葉に一応の納得を見せたミストは、手に残っていた小豆クリーム味のジャガ丸くんを口の中に放り込んでから、暗月の指輪が嵌まっているラニの手を取った。

「まだ祭りは始まってないんだから、もう少し見て行こう」

「仕方がないな……私の王は。伴侶の我儘を聞いてやるのも、私の務めだろう」  
伴侶に手を引かれるラニの顔には、呆れたような声とは正反対である、楽しそうな小さな笑みが浮かんでいた。

「ふーん……ベル君はそんな冒険者と出会っていたんだね」

「そうなんですよ。すごく強かったです」

怪物祭の為に闘技場へと向かって歩いていく民衆から少し離れた場所で、クレプを食べていたベル・クラネルとその主神ヘスティアは、ダンジョンであった話をしていた。ベルがアイズ・ヴァレンシュタイン以外にもダンジョンで誰かに助けられたこと、そしてその人物がベルには想像できない強さであったこと。しかし、ヘスティアにとって重要なことはそんな目をキラキラさせているベルの憧憬ではな

い。

「そのヒューマン、女性だったんだらう？」

「な、なんでわかるんですか!？」

「あー！ やっぱりね！ ベル君はいつもそうだもん！」

クレープを食べながら他愛ない会話している冒険者と主神に、周囲からは生温かい視線が向けられていたが、二人が気にしている様子はない。ワイワイ騒ぎながらクレープを食べ終わったベルとヘスティアは、途中で出会ったエイナ・チュールとの会話を打ち切り、シル・フローヴァを探している最中、モンスターに襲われることになる。

突如として姿を現したモンスター、シルバーバックによって逃走劇を始めたべ

ル・クラネルとヘスティアとは別に、怪物祭を仕切っていた【ガネーシャ・ファミリア】からの協力要請を受け、脱走したモンスター9匹を追っていた冒険者の中には【ロキ・ファミリア】の『劍姫』アイズ・ヴァレンシュタインも含まれていた。

「ん。次」

「おー流石やな、アイズたん」

「後、何匹？」

「2匹や」

風を纏ってソードスタッグを一撃で粉碎したアイズは、傍にやってきた自らの主神であるロキに脱走したモンスターの残数を聞いた。ギルドの職員から事前に何匹かを聞いていたロキの言葉に頷いたアイズは、すぐに建物の上に登って、再びモンスターを探そうとしていたが、モンスターの咆哮を近い位置で聞いてすぐにそちらに向かって走り出した。

「ちよ、アイズたん待ってーな！」

ロキを無視するように街を疾走するアイズは、街中で誰かを探すように走り回るトロールを発見して、レイピアを構えた。そのまま自身の風を纏って突撃しようと

した寸前に、トロールの近くに人影が二つあることに気が付いてトロールの前に降り立った。

「大丈夫、ですか？」

「ん？ なにこのモンスター」

「お前がジャガ丸くんとやらに再び夢中になっている間に出てきたモンスターだ」  
アイズは、私服姿の女性が手に持っている小豆クリーム味のジャガ丸くんへと一瞬視線を奪われたが、すぐに咆哮を上げるトロールへと切り替えた。

「一般人か？ アイズたんがすぐに片付けるからじつとしてたら——」

「——いや、必要ない」

アイズに追い付いてきたロキが、ジャガ丸くんを食べている女性とそれに付き添う形で立っている魔術師然とした女性に安心させるような声をかけた。しかし、ジャガ丸くんを一口で食べきった金髪の女の右手には、既に銀色の錫杖が握られていた。

「失せろ」

アイズの横を通り過ぎて杖を振るったミストに、トロールが反応しようとした瞬

間、周囲の気温が一気に下がると同時に、彼女の右手に魔力の大剣が現出する。

「なんやっ!？」

「魔法？」

半透明で全体から冷気を放つ大剣を片手で持つミストは、既に戦意を失っているトロールを容易く真っ二つにした。勢いのまま石畳に切り傷を付けた魔力の大剣は、触れた部分から周囲を凍結させていた。

「……自分、何者や？」

トロールは20階層以降で見られる中層のモンスターである。現在Lv・5たるアイズにとっては造作もない相手だが、Lv・1の相手ではまず勝てないような敵であるトロールを、見たこともない魔法で真っ二つにする私服姿の女。ロキの記憶には全くない相手であった。

「トロールをワンパン言うならLv・3は間違いなくあるやろ。けど、アンタみたいなやつ顔は見たことあらへん」

「私はただの一般人だよ。冒険者登録はしていないからね」

「はあ？」

冷気を纏った魔力の大剣『アデューラの月の剣』を消したミストは、ロキの目を見つめて薄く笑っていた。同時に、ロキはかつてヘスティアがそうしたように、目の前の人物が嘘を吐いているのかどうか理解できないということに目を見開いた。

「……アルカナム神の力は使える訳あらへん。嘘が見抜けんに神でもない……ホンマに何者やねん」

「お前達、神などが知る必要はない」

「あん？」

笑っているミストを遮るように出たラニは、既に魔術を起動していた。唐突に視界を奪うほどの濃霧が発生すると、二人の存在が目の前から消えたのを感じ取って、ロキは舌打ちした。地面に転がっている綺麗に両断された魔石と、凍ったままの地面だけが先ほどまでの出来事が白昼夢などではないことをロキに知らしめていた。

アデューラの月の剣は、左手持ちの威力がナーフされてからあまり使わなくなつた印象あります

ナーフ後でも充分使える威力はしているんですけどね

評価と感想頂けると嬉しいです



## 冒険者ミストルテイン

評価者が50人を超えて、評価バーが右端まで行きました

評価していただきありがとうございます

お気に入りも1000人を超えましたし、正直圧倒されていますが、これからもご期待に沿えるような小説を書いていけるように努力してまいります

「別に逃げる必要はなかったんじゃない？」

「神と会話を重ねるなど不快だ」

濃霧で姿を消したラニとミストは、建物の上からアイズ・ヴァレンシュタインと狡知の神ロキを見下ろしていた。過去の出来事によって極端な神嫌いとなっているラニの言葉に苦笑いを浮かべながら、【剣姫】アイズ・ヴァレンシュタインを見つめていた。

「……強いね」

「私の王ほどではない」

冒険者としての実力を冷静に判断するミストの言葉に対して、即答するラニに困ったような表情を浮かべた。エルデの王として狭間の地を平定した彼女の實力は確かに突出しているが、目の前の冒険者アイズの實力がミストを相手に手も足も出ない程とは考えられない。

「なんでラニが私の腕を誇ってるのかわからないけど……私も無傷じゃすまないかもよ？」

「それはないな」

「なんで？」

ラニの余りにも身内鼻負な評価に、ミストは依然として困った表情のままだったが、伴侶としてはそれほど誇ってもらえるのは少し嬉しかった。それでも、戦士としてのミストはラニの評価基準を知らなければ納得できない。

「腐敗の女神、星碎きの將軍、冒涇の君主、暗黒の落とし子、狭間の竜王、血の君主、火の巨人、忌み王、満月の女王、黒き劍、最初の王。なにより、黄金律そのも

のを打ち砕いたお前が、あんな小娘に負けるものか」

「そっか……なんか嬉しい」

普段からあまり心の内を言葉にすることのないラニから向けられた、信頼という名の愛を聞いて、ミストは笑みを浮かべた。一方、伴侶が小娘と比べられること自体が不快であったラニは、勢いに任せて自分の王をべた褒めしていることに気が付き、咳払いを一つしてから光の粒子となって消えた。

「照れなくていいのに」

照れ隠しに姿を消したラニに微笑みながら、彼女の言葉によって思い出されたのは狭間の地で戦ったかつての強敵たちの姿である。腐敗に侵され、星に砕かれ、雷に身を裂かれ、火に身を焼かれ、死そのものに貫かれ、忌み呪いに蝕まれ、黄金律の圧倒的な光に消し飛ばされた。幾度となく訪れた死は、未だに褪せ人の中に記憶として刻み込まれている。

「死に物狂いで戦え、若き冒険者たち……『死』を超えた先にしか、答えはないぞ」  
幾多もの死を超えた先に答えを見つけた先達は、眼下で走る冒険者たちを見て目を細めた。既に彼女の冒険は終わっているが、だからこそオラリオの地で未知へと

立ち向かう冒険者が少し羨ましく思えてしまった。

ミストにとっての秩序とは、黄金律が消え去った今となってはラニの考える夜の律である。彼女としてオラリオを動かしているのが生を尊び、死を忌み呪う黄金の律でも、ラニの求める星と月、冷たい夜の律でもないことは知っている。神が下界に降り立ち人と生を共にする世界が、果たして正しいのかどうかは、律の破壊者ではない褪せ人にはわからない。故に、ミストにとってオラリオはラニが否定していかないというだけである。

ミストはオラリオがどうなるうが知ったことではない。だからこそ怪しきしかない商人に対して平然と魔石を渡し、ドロップアイテムも安い値段で買い取らせる。そこにラニが介在することがないからである。

「私の王、そろそろ私は一時の間眠る。この世界ではなにがあるかわからんからな」

「そっか……寂しくなるなあ」

「ふ……眠っていてもお前の傍にいるさ」

街中での戦闘が収まっていない中、それを無視して廃屋へと戻ってきたミストはラニの言葉に寂しさを感じていた。人形に無理矢理自らの魂を入れていくからなのか、ラニは力を制限されているうえに、こうして一定期間眠っていなければ満足に動くこともままならない。エルデンリングを消し、律の力を手に入れた今でもオラリオでは上手く動けなさそうにしていたのは、ミストも気が付いていた。

「急ぐ旅でもない……このオラリオでゆっくりとしているといい」

「そうだなあ……じゃあちよっと冒険者の真似事やってみようかな」

「好きにしろ。私の王は、戦っている姿こそ相応しい」

珍しく楽しそうな笑みを浮かべたまま目を閉じたラニへ、ミストは微笑んだ。狭間の地で冒険を終えたミストにとって、このオラリオへとやってきたのはラニの旅に付き合っていたからに過ぎない。しかし、その旅も少しの休憩期間に入った。

「ラニには気付かれてたのかな、やっぱり」

伴侶たるラニと共に月へと向かう無限の様な旅路は、決して退屈などではない。しかし、ミストにとっては戦いこそが生きることなのだ。エルデの王とは強さ故である。

神話の怪物共と真正面から戦うことができるミストと、まともに打ち合える冒険者はオラリオには多くないだろう。だが、オラリオに立つ冒険者は、その程度で折れるほど弱くもない。たった数日間しか過ごしていない都市ではあるが、ミストは確信していた。

「私はまだまだ満足できなさそうだ。いっそ私が育てるのもありか？」

魔術の師たる女性を思い出して笑みを浮かべたミストは、私服からオルドビスの鎧へと着替えて立ち上がった。目指す場所は迷宮都市オラリオの中心地であるダンジョン。神の伴侶たる王としての役目を一時置いたミストは、ただ人として未知への探求を求めダンジョンへと向かって歩きだした。

冒険者として活動します（正規とは言っていない）  
因みに、ラニ様はすぐに起こす予定です  
だってラニ様書きたいから

評価と感想頂けると嬉しいです



## 迷宮探索

ダンジョン

前時代のエルデの王は竜王プラキドサクス

黄金律最初のエルデの王は蛮地の王ホーラ・ルー

あせんちゅはデミゴッドも古竜も関係なく皆殺し

つまりエルデの王は蛮族

Q・E・D

「……カエル、か？」

暇ができたことでダンジョンに潜っていたミストは、6階層でフログ・シューターと相対していた。単眼のカエルを見て首を傾げたミストは、突然長い舌を打ち出してきたカエルに驚いていたが、特に脅威になることもなかった。なにせ、フログ・シューターの舌は坩堝の騎士が纏う鎧に当たったところでなんの衝撃も彼

女に与えることがなかったからである。

「うーん……」

もはや相手する必要性すらも感じない程度のモンスターだが、絡まれればどんな存在だろうが叩き潰すのが狭間の地をかけた彼女の信条である。再び打ち出されたフロッグ・シューターの舌を最初から避けもせず、そのまま近づいて取り出した右手の大剣で以って叩き潰す。一撃でダンジョンを陥没させるほどの重さを見せた大剣は、ミストが着込んでいる鎧と同じ銅色をしていた。

「あ」

一振りで魔石まで砕いてしまったことに声が出たミストは、小さな溜息を吐いた。魔石は砕けてしまうと価値が急激に落ちてしまうことを商人から聞いていたミストは、勿体なく思いながらも砕けた魔石を拾った。ミストは『オルドビスの大剣』を肩に乗せ、一振りで叩き潰されたフロッグ・シューターが灰になるのを確認してから、後ろを振り向いてオルドビスの大剣を構えた。

ダンジョンの壁から数匹のウォーシャドウが姿を現し、目の前にいるミストを敵として認識していた。全身真っ黒の人型をしているモンスターは「新米殺し」の異

名を持つ危険なモンスターである。上層の前半で出会うモンスターとしては非常に危険な存在であり、鋭いナイフのような指による攻撃を真正面から受ければ、冒険者の命を容易く奪うことは間違いない。

六体程度のウォーシャドウならば、盾でも構えながらオールドビスの大剣を振るっていけばすぐに全滅させることができると考えていたミストだったが、ウォーシャドウの背後の壁が再びひび割れ、追加でウォーシャドウとフロッグ・シューターを生み出していった。

『……………?』

前にいたウォーシャドウがミストへと接近して鋭利な爪を振るったが、やはり塙の鎧には傷一つない。攻撃しているのに全く効いている感触がないことに疑問を持ったウォーシャドウが、少し距離を取って複数のフロッグ・シューターと共にミストを見た時、既にそれは現れていた。

「えい」

周囲に他の冒険者がいないことを確認したミストは、可愛い掛け声と共に身体から半透明の首を生み出した。それは冒険者でなくとも、神やあらゆる<sup>デミヒューマン</sup>亜人も、誰

もが知っている。古来、数多くの伝説や物語に登場する生物であり、迷宮の奥深くまで潜る冒険者ならば似たような姿のモンスターを見ることもあるかもしれない。角を持ち身体は鱗に覆われ空を飛ぶために発達した大きな翼を持つ生物『竜』である。

「これで終わり」

祈祷『プラキドサクスの滅び』により顕現した、時の狭間に永遠に座していた竜王プラキドサクスの首。かつて黄金律の時代が到来する前に世界を治めていた狭間の地の王。永遠なる時間を持ちながら黄金律に敗れたその竜王は、後に新たなエルデの王となる一人の褪せ人に滅ぼされた。『プラキドサクスの滅び』は、その滅ぶ際の断末魔を再現する祈祷である。

ダンジョンに響き渡った永遠なる竜王の断末魔は、黄金色の炎をまき散らす。突然ダンジョンに現れた竜王という絶対的な上位存在を前に動くことができなかったウォーシャドウとフロッグ・シューターの群れは、竜王の断末魔に巻き込まれてその身体を焼き尽くされた。冒険者の扱う魔法などとは比べ物にならない威力の炎を放ったミストは、特に気にする様子もなく、残されたドロップアイテムと魔石だけ

回収してそのままダンジョンを歩き出した。

この日以降、ダンジョン6階層には誰も見たことがないドラゴン型のモンスターが出現することがあるという噂がオラリオに流れることになるが、ミストがその原因に気が付くことはなかった。

「うーん……潜っても強さが変わっているのかよくわからない」

ダンジョン18階層である迷宮アンダー・リゾートの楽園へとやってきたミストは、安全階層セーフティポイントを素通りしてダンジョンの19階層へと赴こうとしていた。以前にも35階層よりも下の迷宮まで潜ったことのあるミストだが、その時は道中の敵を全て適当な魔術であしらっていたため記憶になかった。今回は前回とは違いゆっくりと相手を観察しながら降りてきているので幾つかのモンスターの特徴を覚えていた。

「蟻、ゴリラ、牛頭、火を吐く犬、兎、虎、かな？　兎の角が手に入ったのは良かったかな」

キラアアント、シルバーバック、ミノタウロス、ヘルハウンド、アルミラージ、ライガーファングのことである。しかし、ミストにとってみればどれも大差ないので特徴が記憶にあるだけで、強さを感じた訳ではない。

「あった」

以前ダンジョンを潜った時にラニが設置した祝福を発見したミストは、消耗など精神力ちからだけですんでいたが、一度祝福で休んでいくことに決めて、19階層への階段へと向けていた足を祝福へと向けた。ラニの律を示すかのように青白く光る祝福の傍に座ったミストは、自らの安全を確保した独特な感覚を黙って味わっていた。

ダンジョンでプラキドサクスの滅びをぶっ放すのは間違っている（確信）

評価と感想頂けると嬉しいです

追記

10話も投稿したんで連載に変えました

完結の予定までまだプロットは練れていないのですが、お付き合いいただけると嬉しいです



白濁色の壁が聳え立つダンジョンで、武器を持つ骨とエルデの王は相対していた。死霊魔術によって動かされる骨を見慣れているミストは、特になにかを思うことなくオルドビスの大剣を振るう。骨の武器を持ってミストと相対するモンスター、スパルトイはその武器で大剣を防いだ。

「少しマシになってきたな……やっともとにも戦えそうだ」

喜色満面の笑みを浮かべているミストに対し、オルドビスの大剣を武器で受けたスパルトイは恐怖に支配されていた。無造作に振るわれたオルドビスの大剣を受け止めたスパルトイが持つ骨の剣は、既に半ばから叩き折られている。つまり、もう一度その大剣を振るわれればスパルトイには生き残る術が存在しない。

『——ッ!?!』

苦し紛れに盾を構えたスパルトイは、その骨の盾もろとも両断された。灰となって消えていくスパルトイを尻目に、ミストは背後から近寄ってきていたリザードマン・エリートの攻撃を大盾で受けた。

『ゲギャァッ!?!』

攻撃を容易く弾かれたリザードマン・エリートにできた思考の空白時間に、ミストはオールドビスの大剣を突き出した。空白と言っても、1秒にも満たないほんの少しの動揺にしか過ぎない。だが、狭間の地で最強を証明したエルデの王にとって、あまりにも大きすぎる隙だった。喉を貫かれて絶命したりザードマン・エリートを捨て、ミストは新たな獲物を求めて周囲に目を向けた。

「……まだまだいけそうだなッ！」

ここは死線と呼ばれる深層の序盤、37階層ホワイトパレス白宮殿である。

「はぁ……」

リザードマン・エリートとスパルトイの死体が山のように積み重なっている場所

で、ミストは『城館のタワーシールド』を地面に置いた。彼女にとって37階層は死線デッドライン足りえなかつたのだ。

ミストは狭間の地に導かれる前、記憶も掠れてしまつてよく思い出せない昔のことを考えていた。と言うのも、彼女は闘争本能が高まってくると、口調が荒々しく男のようなものになつていく。それは狭間の地に訪れる前まで男であつたことが影響しているのか、ミスト本人にもわからない。

死んだ記憶もないのに前世と呼ぶのも不思議な話だが、その前世では彼女は男であつた。その記憶の弊害で闘争本能が高まると本性が飛び出してくるのとは別に、一つだけ彼女の得になつてゐることがあつた。それは、同性であるはずのラニへの感情である。彼女はラニのことを心の底から敬愛しているが、それ以上に伴侶として恋愛対象として愛している。これは元々の性別からくる好みなのだろうと、勝手に自己完結してゐた。

ダンジョン内でも何でもいいことを考えていたミストは、新たに生まれようとしてゐるモンスターの音を聞き、城館のタワーシールドを拾つた。

「確かこの先に……」

ダンジョンの壁から生まれたスカル・シープは、ミストを認識した瞬間に世界が二つに割れた。オールドビスの大剣によってスカル・シープを両断したミストは、リザードマン・エリートとスパルトイの魔石を回収しながら、無限に戦える場所『闘技場』へ歩を進めた。

闘技場コロシウムは間隔なく一定数のモンスターが常に湧き続ける空間である。第一級冒険者でも決して足を踏み入れないと言われる場所であるが、ミストにとってはどうでもよい話であった。彼女にとってみれば、わざわざ獲物を探して歩く必要のない場所程度の認識である。

「……本当に沢山いるな」

思わず感嘆の声を上げてしまうほどのモンスターの数に、ミストは少し呆れてい

た。

冒険者が足を踏み入れるまでモンスター同士で戦い続けていると言われる闘技場に、一人の冒険者がやってきた。その存在にいち早く気が付いたスパルトイは、リザードマン・エリートに向けていた剣をすぐにミストへと向けて走り出した。

『ギィギャー！』

スパルトイの剣を盾で受けたミストは、無造作にオルドビスの大剣を振るってその背骨を両断した。波状攻撃のようにスパルトイの後ろからやってきたリザードマン・エリートは、続くタワーシールドのシールドバッシュを受けて仰け反った所を大剣で叩き潰される。

城館のタワーシールドとオルドビスの大剣を手から消したミストは、左手に竜餐の印を持つ。竜餐の祈祷を強化するその聖印によって放たれるものは、文字通り竜の心臓を食らって手に入れた絶大な力である。本能的に放たれる祈祷を脅威と感じたモンスターたちは一斉にミストに襲い掛かろうとして、空中で腐り果てた。

「腐り果てるモンスター」

放たれた祈祷は『エグズキスの腐敗』である。朱き腐敗に侵されながらも、竜餐

への憎悪を忘れなかった腐りゆくエグズキスの力を振るうミストは、モンスターよりもモンスターらしいと言える。

朱き腐敗に侵されたモンスターたちはミストに近づく前に腐り果てて倒れていく。スカル・シープは身体を支え切れずに地に伏せ、リザードマン・エリートは鱗を溶かしながら倒れ伏し、ルー・ガルはミストから逃げようと背を向けたまま動かなくなり、スパルトイは骨を腐らせて粉と消え、オブシディアン・ソルジャーは黒曜石の輝きを失わせる。

「まるでケイリッドのような地獄絵図だな」

かつて朱き腐敗の女神によって腐らされた土地を思い出しながら、ミストは皮肉気に笑った。殺される度に数を合わせるように生み出されるモンスターたちは、しばらくその場にとどまり続けた朱き腐敗によって生み出された瞬間に腐り果てた。猛毒を持つペルダが生み出された瞬間に、毒以上の腐敗によって死んでいく様を見ながら、ミストは魔石を回収するテマを考えて溜息を吐いた。

腐敗は延々とナーフされているイメージ

評価と感想頂けると嬉しいです



## 小さな違和感

「……あんまり良くないわね」

「はあー疲れた。どうしたのヘファイストス」

店の中で【ヘファイストス・ファミリア】の主神である鍛冶の神ヘファイストスが書類を見て、眉間に皺をよせていた。そこに現れたのは、自らの眷属が持つナイフをオーダーメイドしてもらった代わりに、ヘファイストスの店で働かせられている神ヘステイアだった。休憩時間に友人であるヘファイストスの執務室までやってきたヘステイアは、ヘファイストスの難しそうな顔に首を傾げた。

「あなたには関係……いや、あるわね。ちょっと見てもらっていいかしら？」

「え？　ボクに見せてもいいのかい？」

「問題ないわ。別に機密でもなんでもないもの」

ヘファイストスの許可を貰って紙を見せてもらったヘステイアは、そこに書かれている数字と文字の羅列をゆっくりと読み解いていた。ヘステイアが持つ紙には、ここ数日間に市場に流れたモンスタードロップアイテム名と、市場に流れている

数と市場価格が並べられていた。

「これ、価格が下落しているのかい？」

「そうよ。異常なほどにね」

額としてはほんの少しの下がり方でしかないが、鍛冶系ファミリアの最大手として常に市場を見てきたヘファイストスの目に留まった違和感。ヘスティアはヘファイストスに言われなければ気が付かなかったが、よく見れば上層から下層までのドロップアイテムが普段より多く市場に流れているのだ。

「これがボクになんの関係があるんだい？」

「これが続くようなら、あんたの子が持つてくるような上層のドロップアイテムが安く買い叩かれるようになるのよ」

「そ、それは困るな」

【ヘスティア・ファミリア】の財政を支えているのは、たった一人の眷属ベル・クラネルである。そんな彼が持つてきたドロップアイテムが二束三文になっては、将来的な財政に影響する可能性は充分にある。

「けど、なんでこんな風になったりするんだい？　ボクは下界に來たのがそれほ

ど前じゃないから詳しくないけど……冒険者がドロップアイテムを持って帰ってくるのは普通だろう？」

「上層、中層ぐらいまでならね。けど、下層以降はそもそも潜れる冒険者が少なくなってくるし、深層のドロップアイテムは、ものによっては常に品切れなんてことも普通にあり得るわ」

ヘアリストスが一番問題視していたのは、この市場の混乱とも言えない小さな歪みが、いつか大きなうねりに変わってオラリオを飲み込む。そんな気がして仕方がないのだ。

「気を付けなさい。あんたの子も……少なくとも、とんでもない頻度で深層まで潜ってモンスターを狩り続けている奴が今、オラリオにはいるわ」

「……わかった。ベル君には伝えておくよ」

「そうしておいて……とところで、今その眷属はなにしてるのよ」

「ベル君かい？　ベル君はいつも通り、ダンジョンさ」

「っ！」

ダンジョン7階層で、ベル・クラネルは【ヘステイフ神のナイフ】を片手に疾走していた。ダンジョンの7階層と言えば、ウォーシャドウに並び『新米殺し』と名高いキラアアントが闊歩している階層である。しかし、ベル・クラネルはそんなキラアアントを一蹴。硬い外殻を持つはずのキラアアントの首を切断したベルは、一つ息を吐いてから魔石を回収し始めた。

「やっぱり神様に感謝しなくちゃなあ……このナイフ」

「いいナイフだね。中々の業物だ」

「うえひい!?! み、みみみミストさん!?!」

キラアアントの魔石を回収したベルが、うっとりとした表情でナイフを見つめていると、横から音もなく坩堝の騎士が姿を現した。突然現れた知り合いの姿に動揺していたベルは、息を整えてからゆっくとミストを見上げた。

「だ、ダンジョンに来ていたんですね」

「ん？ さては私が冒険者登録していないことを知ったかい？」

「そ、そんなこと……ナイデスヨ？」

「嘘が下手だねベル・クラネル君」

一瞬で嘘だと見抜かれたことに落ち込みながら、ベルは覚悟を決めてミストへと視線を向けた。

「なんで、冒険者登録をしていないんですか？」

余計なことを言わずに直球で言い辛いことへ突っ込んできたベルに、ミストは兜の中で笑みを浮かべていた。闇派閥イツイルスの存在などまだ知らないベルからすれば、冒険者登録をせずにただ潜っている人程度の認識であるが、一定以上の知識がある人間ならば即座に武器を向けてもおかしくない。

「簡単な話、私はファルナとやらを持っていないからさ」

「神ファルナの恩恵を!? ど、どうやってダンジョンに潜ってるんですか!？」

「戦闘経験なら豊富だ」

ミストは終始、嘘は言っていない。恩恵を持っていないのも本当であり、戦闘経

験が豊富なことも間違いではない。人を疑うことが苦手なベルは、そこでミストへ疑問をぶつけるのを諦めた。

「私は丁度、オラリオに戻るところだね。ベル・クラネル君はどうする？」

「べ、ベルでいいですよ。僕はまだもう少し潜っていきます」

「そうか。君の武運を祈るよ」

軽く手を振って6階層へと続く階段に向かって歩きだしたミストは、緩む頬を抑えきれなかった。

（成長している。私が初めて会った時とは既に別人のような強さを手に入れていた……あれはナイフに任せた技量ではない。やはり本物だったか……ベル・クラネル）

ミストは初めてベル・クラネルに会った時から、内側で渦巻いているルーンの強さに気が付いていた。かつて膨大なルーンを力に変えてエルデの王となった自分と同じように、その内側のルーンはどんどん強くになっている。このオラリオの中で誰よりも冒険者としての素質があるものだと考えていたミストは、想像以上の速度で強くなるベル・クラネルに笑みを抑えきれない。

「いつか潰すことになるか、それとも良き隣人のままでいられるか。ラニ、次第かな」

どうなるかはラニ様の決定次第です

評価と感想頂けると嬉しいです



## 取引

「これはまた……素晴らしい量ですな」

「闘技場と呼ばれていた場所に少し引きこもってね」  
コロシウム

「闘技場……37階層にあると言われているあれ、ですか？」

「そう」

ダンジョンの37階層から下はれっきとした深層域である。限られた冒険者しか足を踏み入れることができず、第一級冒険者であろうとも少しの油断で命を刈り取られる本物の地獄。限られたファミリアにしか情報が公開されていないため、その様子を知る者は自らの足で歩いたものだけである。37階層ぐらいまでなら、一般人にも情報が噂として出回っていないこともないが、ミストが持ってきたアイテムを渡されている商人も初めて見るようなものが存在する。

「閻派閥イヅイルスでもこんな深層域まで行ける人はいませんよ」

「そうなんだ」

閻派閥がそもそもなにか知らないミストは適当に話を流しながら、深層のモンス

ターから手に入れた魔石を机に並べていた。商人の部下と思われる人間たちが慌ただしそうにドロップアイテムの鑑定と払<sup>ツアリス</sup>う金を計算している中、商人は顎に手を当てて唸っていた。

「……貴方様は都市を混乱に陥れようとする闇の連中、闇派閥についてどう思いますか？」

「興味がないね」

「そうですか」

ギルドに所属している冒険者でなくとも、都市を混乱に陥れようとするものの存在を聞けば誰もが顔を顰めてしまおうだろう。しかし、深層域まで単独で潜り、無傷のまま帰ってきているミストは大して興味もない。彼女にとって秩序とはラニそのものであり、彼女にとっての敵はラニを害そうとする者とラニの理想を阻むものである。

「私、実は闇派閥と密かに繋がってしまいましたね。最近は連中に勧誘されているのですよ。これ程の魔石とドロップアイテムを持っている商人ならば、私たちと共に歩もうと」

「ほお……あまり良さげな話ではなさそうだね」

「おっしゃる通りです」

一見すると単純に闇派閥の仲間となり共に都市へ混乱を招こうと勧誘しているようだが、実のところ商人は脅迫されているのだ。

「受け入れなければ、恐らく他の闇派閥と繋がっているファミリアの冒険者から、なにかと理由を付けられて潰されるか、都市の治安を維持している【ガネーシャ・ファミリア】に密告されて終わりでしょう」

「それは困るね。つまり、私に君も守って欲しい、と?」  
「お話が早くて助かります」

商人は運命の岐路に立たされている。闇派閥についてそのまま数多のファミリアに潰されるか、闇派閥との手を切って狙われ続けるか。一度でも儲けの為に闇派閥と手を組んだ者の末路として相応しい破滅への岐路であるが、そこに突然もう一つの道が現れた。

「闇派閥は派手に過ぎます。いずれファミリア連合に滅ぼされることになるでしょう……ですから、私は貴方様を使って中立の立場を買きたい」

「混沌側から金を貰い、秩序側から安全を貰う……なるほど、素晴らしい商人だね」

「お褒めの言葉として受け取っておきます」

どちらからも甘い蜜を啜ることしか考えていない商人の言葉に、ミストはわかりやすくいいと頷いた。当然、そんなことをすれば商人はどちらからも目を付けられて簡単に押し潰されるのだが、そこで出てくるのがミストというイレギュラーである。深層域に単独で潜りながら無傷で帰ってくる力。オラリオの秩序に全く興味を示さない姿勢。商人の事情に深く突っ込んでこない性質。商人にとってミストは運命の相手と言っても過言ではないだろう。

「私としては、別にオラリオがどうなるうがどうでもいいから……ただ魔石とドロップアイテムを買い取ってくれればいいよ」

「勿論です」

「じゃあ上層から下層の魔石も買い取って」

「……………まあ、いいでしょう」

下層はともかく、上層と中層の魔石など買い取ったところで商人としてはあまり旨味がない話だが、ミストを利用して安全を確保するためには必要な経費であると

割り切り、商人は深層の魔石同様に8割程度の値段で買い取ることとなった。

「んー……おばちゃん、小豆クリーム味3つ」

「はいよ」

商人に魔石とドロップアイテムを買い取ってもらったミストは、その金を持ってジャガ丸くんの出店に足を向けていた。モンスターフィリア怪物祭以降、ジャガ丸くんの味を気に入ったミストは、定期的にジャガ丸くんを食べていた。

「小豆クリーム味1つ」

「はいよ」

一人で満足気にジャガ丸くんの小豆クリーム味を食べていたミストは、ベンチの横に自分と同じ小豆クリーム味のジャガ丸くんを持った人が座つたのを見て視線を

向けた。

「ん？ 君は……」

「フィリア祭の時の？」

横に座っていたのは、ミストが持つ金髪よりも更に輝いて見える金髪を持つ少女、アイズ・ヴァレンシユタインだった。ミストは美しい少女だなと思いつつも、アイズの腰に備え付けられている業物に目が吸われていた。

「……これ？」

「ああ……いい剣だ。よく鍛えられているし、鍛冶師の魂が籠められている」

ミストは自らの持っている武器を鍛えた円卓の鍛冶屋ヒューグや、共にラニに仕えた仲間である鍛冶師イジーを思い出して柔らかな笑みを浮かべた。アイズは、ミストの柔らかな笑みを見て少し驚いたような表情を見せた。アイズが知っているミストなど、私服姿で巨大な魔力の大剣を振るう姿だけだったからである。

「……貴方は、何者、なんですか？」

「それは秘密だ。女は秘密の数だけ美しくなる、らしいぞ？」

旅巫女のローブを揺らしながら、ミストはアイズから離れていった。自らの主神

であるロキが気にしていた存在ながら、同じジャガ丸くんを愛する同士なのだと思  
識したアイズは、名前を聞きそびれたことを思い出しながらジャガ丸くんに齧りつ  
いた。

---

あせんちゅは今のところ闇派閥でもオラリオ派でもありません  
敢えて言うなら第三勢力です

評価と感想頂けると嬉しいです



## 霊馬

「ダンジョンは楽しいな……幾ら敵を蹂躪しても無限に湧き出てくる」

正面から突進してくるサイを叩き潰したミストは、背後から近寄ってきていた別のサイを無造作になぎ倒す。オールドビスの大剣にへばりついた血を眺めながら、正面の壁から湧き出てくるモンスターへと意識を向けるミストは、そのモンスターの名前を知らない。ブラックライノスと呼ばれる二足歩行型のサイは、ダンジョンの51階層に出現するモンスターである。

怪物モンスターバスターの宴として生まれ、先頭にいたブラックライノスがミストを轢き潰そうと迫ったが『アデューラの月の剣』で無慈悲に両断される。敵の強さを認識したブラックライノスは、ミストを取り囲むように移動して、一斉に襲い掛かった。

周囲から近寄ってくるブラックライノスを前に、ミストはゆっくりと杖をダンジョンの地面に突き刺した。瞬間、ミストを中心として氷の嵐が周囲に吹き荒れる。ミストを殺そうと近寄っていたブラックライノスたちはその嵐によって身体がゆっくりと凍り付いていく。火の巨人と戦い続けたザミエルの騎士たちが得意とし

た『ザミエルの氷嵐』は、51階層という深層域のモンスターに命すらも容易く奪って行く。

「……終わりか？」

ミストは『アデューラの月の剣』を手に、凍り付いたブラックライノスたちを両断する。かろうじて生き残っていたブラックライノスも、すぐにその命を散らすことになる。エルデの王に、慈悲の心など存在しないのだ。

「角、か……」

51階層でブラックライノスの死体を前に座り込んでいるミストは、ドロップアイテムであるブラックライノスの角を片手に唸っていた。角をそのまま武器にするには少し短いことに落胆しながら、金になるのならばなんでもいいと思ひ、全てを

ルーンとして自らの内へとしまい込む。あらゆる物体をルーンとして自らの内へとしまい込む力は、ルーンを力として自らの器を強化する褪せ人ならではの収納方法である。

ブラックライノスの魔石と角を回収し終わったミストの視界には、狭い通路を進行する芋虫の姿があった。ミストを発見すると一直線に向かつてきた芋虫を見て、ミストは生理的な嫌悪感を抱きながら竜餐の印を右手に持つ。

放たれる竜の力は全てを凍結させる氷の霧。『ボレアリスの霧』は巨人たちの山嶺で竜として生きていた凍てつく霧、ボレアリスの力を振るう祈禱である。氷の霧は触れたものの体温を奪っていき、瞬く間にミストへと近寄ってきていた芋虫の全てを醜い水像へと変えた。身体のコまで凍結させる霧を受けて動けるモンスターは存在しない。

気持ち悪い芋虫を見たせいか、やる気が起きなくなったミストは反転して50階層へ上がる為の階段に向かつて歩きだした。道中で現れるブラックライノスやデフォルメス・スパイダーをオールドビスの大剣で叩き潰したミストは、欠伸をしながら50階層へと戻ってきた。

ダンジョンの50階層ともなると広大過ぎて、ミストとしても目的がどこにあるのか全く見当がついていなかった。深層域にある安全階層セーフティポイントである50階層では、モンスターも現れないためミストはただ歩くことしかできない。

しばらく51階層への階段付近で周囲を見ていたミストは、諦めたように溜息を一つ吐いてから、自らの指につけられている指輪を使って笛を吹いた。決して大きな音はしない音だが、不思議とどこまでも響くような音を鳴らした瞬間に、ミストの背後から馬がゆっくりと歩いてくる。

「久しぶりだね、トレント」

角の生えた馬であるトレントは、褪せ人を認識するとゆっくりと近寄ってきて鼻を擦りつけた。狭間の地で自らの足として活躍してくれたトレントに、ミストは嬉しそうに首を撫でてやった。

「相変わらずちよつとせっかちな性格は変わらないね」

首を撫でられたことに嬉しそうな態度を見せるが、自分が呼ばれる理由は長距離を移動する為であると認識しているトレントは、すぐにミストに対し背中に乗れと言わんばかりに身体を揺らした。苦笑しながら、ミストは言われた通りにトレント

の背中に騎乗する。乗り慣れた感覚を味わっていたミストは、いつも通り手綱を握ってトレントを進ませる。

トレントによって格段に移動速度が速くなったミストは、しばらく50階層を進んでいるとお目当てのものを発見する。

「祝福発見……ありがとうねトレント」

トレントから降りたミストはゆっくりと祝福に近寄り、靈馬としてラニの様に姿を消していくトレントに礼を言った。気にするなと言わんばかりに鼻を鳴らしたトレントに微笑んだミストは、祝福に触れた。

50階層に置いてある祝福は、黄金律ではなくラニが作り出した祝福であるため、淡い青色の光を周囲にまき散らしながら褪せ人を癒す。そして、ミストは先程のトレントと同じように祝福を使ってその身体を粒子として消していく。しばらくすると、その場には淡く輝く祝福だけが残っていた。

---

ドラゴンブレス系の祈祷が、話の展開で使いやすすぎる……やはりドラゴンは偉

評価と感想頂けると嬉しいです

## リヴィラの街

祝福を使用して50階層から18階層まで移動したミストは、平穩そのものだと思  
い込んでいた安全階層セーフティポイントが炎上しているのを見て唾然としていた。ダンジョンの知  
識が豊富にあると言える訳ではないが、安全階層にモンスターが現れないことは、  
ダンジョンに潜る者の常識として知っていた。安全階層にモンスターが現れるとい  
う異常事態イレギュラーに対して、ミストは街のある方向から聞こえてくる冒険者たちの怒号を  
聞き取って指笛を鳴らした。

「頼むトレント」

再び呼び出したトレントに跨ってすぐに手綱を引いたミストは、安全階層に起  
こった異常事態の解決のために駆けだした訳ではない。彼女の頭にあるのは異常事  
態が何故起きたのかを知りたいという知的好奇心だけであり、その在り方は彼女の  
伴侶が最も嫌う超越存在デウスデアのそれとなにも変わらない。

火の手が上がっている安全階層の街、リヴィラを見てミストは目を細めた。黄緑  
色の気色悪い花の様なモンスターと戦っている多くの冒険者たちの中に、幾人かの

実力者を見つめていた。ミストの視線の先にいるのは【ロキ・ファミリア】の冒険者であるフィン・ディムナ、リヴェリア・リヨス・アールヴ、ティオナ・ヒリュテ、ティオネ・ヒリュテ。ミストの目についた冒険者はそれほど数は多くないが、どれも相応の実力を身に着けている。

今のうちに手を出してしまおうかとも考えたミストだが、自分の持つ魔石とドロップアイテムを換金してくれる商人に迷惑がかかると思って動きを止めた。互いを利用し合うと話し合ったばかりなのに迷惑をかけるのは面倒だと考え、いっそ冒険者側として参加しようと思いついた。

手綱を思いきり引っ張り方向を転換したミストは、トレントを走らせる。長い傾斜を降りてリヴィラの街へと向かうミストは道中の食人花を避けながら広場の中心へと降り立つ。突然現れた存在に周囲の冒険者が一斉に武器を構えてミストへと突きつけたが、そんなことにお構いなく食人花は動き続けていた。

「くッ!? ボールス! 指揮は任せるよ!」

ミストに意識を持っていかれた一瞬のうちに、数多くの冒険者を吹き飛ばされたことで前線が崩れかける。慌てたフィンがリヴィラの街のトップであるボールスに

指揮を任せて女体型のモンスターへと向かって走り出した。

「……手伝ってやろうと思っただのに、武器を構えられるとはな」

「てめえが何者かは知らねえが、今は緊急事態なんだよ！ 誰も知らねえ鎧姿がダンジョン内なのに馬に乗って現れたら武器ぐらい向けるだろうが」

「トレントはその程度では怯えないが、いいか」

周囲の冒険者数名に武器を突き付けられている状況の中でも、ミストは冷静な声色のままトレントから降りた。もういいのかと言わんばかりに鼻を鳴らしたトレントの首を撫でたミストは、どこからともなく大剣を取り出した。大剣とは言うが、その見た目は明らかに建物の一部分でできている鈍器にしか見えない。

「そら、そこをどけ」

「ああ!?!」

「死んでも知らんぞ」

警告を一度だけ挟んだミストは『遺跡の大剣』を頭上に掲げた。遺跡の破片で出ている大剣は、ミストの意志に応えるように紫色のオーラと雷を纏い始める。その様子を見て周囲の冒険者は、それが高位の魔剣だと勘違いして射線上から逃げる

ように移動する。

「なにをする気だ!？」

「そこで見ていろ」

背後から聞こえてきたリヴェリアの声に適当に返しながら、ミストは遺跡の大剣を振り下ろした。戦技『崩壊波』は、遺跡の大剣に刻み込まれた崩落の力を開放する技である。振り下ろされた遺跡の大剣から放たれる崩壊波は直線上にあった建物を破壊しながら女体型へと迫り、下半身を作っている食人花の多数を切断した。魔力すらも感じさせずに発生した大規模攻撃を受けた女体型は、下半身の右側に大きな傷を受けてバランスを崩す。

「……一撃だけで充分だろう。後はなんとかしろ」

「ま、待ちやがれ！」

ボールの言葉を完全に無視したミストは、待機させていたトレントに素早く騎乗するとそのままリヴェリアの出口へと向かって走り出した。レフィーヤとリヴェリアも追いかけてようとする構えを見せたが、下半身に大傷を受けてのたうち回る女体型を優先させた。

都市二大派閥のうち片方の力をそれとなく確認したミストは、全速力でトレントを走らせながらその姿を思い出していた。団長であるフィンを中心に良くまとまっている集団ではあったが、ミストは脅威と思えるほどの力を感じ取れなかった。それは決して【ロキ・ファミア】の冒険者たちが弱いという訳ではなく、かつて狭間の地で対峙したデミゴッドたちと比べれば緊張感が薄れてしまうというだけの話である。

「増援か？」

リヴィラの街から離れて上層を目指すミストは、トレントに乗ったまま駆けている道中で赤髪の女が、アイズ・ヴァレンシュタインと戦っている姿を見かけた。馬に乗っていることに訝し気な表情を浮かべながらも、自らの敵であると判断した女が馬上のミストへと飛びかかるが、反射的に振るわれた遺跡の大剣によって軽々しく吹き飛んでいった。突然襲われることには慣れていているミストは、絡まれたことに面倒を感じていたが、売られた喧嘩は全て買って叩き潰すのがミストの流儀である。

「くッ……なんだ今の力は」

「さっさと終わらせて帰らせてもらおうぞ。換金も一瞬じゃないんだ」

赤髪の女の前にはエルデの王<sup>望</sup>が立っていた。

レヴィスちゃん……人間性を捧げよ  
評価と感想頂けると嬉しいです

## 怪しい冒険者

リヴィラの街で女体型と冒険者たちとの戦いが起きている中、赤髪の調教師はエルデの王と相対していた。

「がっ!?!」

女はLv・5であるアイズ・ヴァレンシユタインを圧倒できる力を持っているにもかかわらず、ミストを相手に何度も地面を転がっていた。明らかにLv・5の冒険者よりも格上の力を持つ鎧の戦士に、アイズも赤髪の女も驚愕に目を見開いていた。

振るわれる長剣は容易く見切られタワーシールドによって防がれ、カウンターで振るわれる遺跡の大剣を避けて距離を取ると、容赦なく『崩壊波』が飛んでくる。ダンジョンの地面を抉るような威力の衝撃波を何度も放っているが、ミストの動きに変化は訪れない。

「ちいッ!?!」

「遅い」

「ぐっ……クソ!」

明らかに人類が持つて振るえるような重量ではない武器を、軽々しく片手で振るう化け物を前に、赤髪の女は撤退の選択肢を思い浮かべていた。アイズ・ヴァレンシュタインとの戦いは問題なく進んでいたが、突然現れた謎の冒険者は本気を出している様子がないまま自分を軽く凌駕しているという事実に加え、既に目的であった緑の宝玉の回収は失敗しているのだ。いくら『アリア』を目前にしたからと言って、これ以上目の前の騎士と戦いを続けなければ気まぐれで命を刈り取られかねない。確実な生存のために撤退を選択した赤髪の女は、次の瞬間に全身で悪寒を感じ取った。

「今、気持ちを退かせたな」

「な、にっ!？」

「興奮だ。肝心なところで臆するとは……失せろ」

先程まででもついでいくのがやっとならった赤髪の女は、本気で殺気を放ったミストに対して一瞬臆した。それを感じ取ったミストは失望の表情を浮かべながら、さっきまでの剣戟よりも数段早いスピードで踏み込み、長剣ごと右腕を切断した。飛んでいく右腕に信じられないものを見るような視線を向けた女は、反射的に左腕

を振るったが無情にも盾に阻まれる。

「恐怖に呑まれた敵を斬ることほど楽しくないこともない。しかし、売られた喧嘩は倍返しにするのが私の流儀なんだ。ここで死ぬ」

「ッ!？」

無慈悲で無感動な死の宣告を受けて、女は宙を舞って地面に落ちた自らの右腕をミストに向かって投げつけた。当然のように投げつけられた腕を切断したミストは、相手が目くらましをして逃げようとしていることを察していたため、進行方向へと向かって『崩壊波』を放つ。周囲の瓦礫を吹き飛ばしながら飛んでくる崩壊波を背中で受けた女は、その勢いのまま崖下の湖まで落ちていった。

「……やったんですか？」

「いや……逃げられたな。崩壊波を上手く使ったようだ」

ダンジョンのモンスターであろうとも、殺せば相手の持つルーンをその身に吸収することができるミストは、赤髪の女が未だに生きていることを確信していた。崩壊波の衝撃によって巻き上げられた瓦礫を盾にして直撃を避け、その勢いのまま湖の中へと逃げ込んだのだろうと推測したミストは、遺跡の大剣をルーンとして消

し、アイズと向き合った。

「ありがとうございます……ごぞいます……あの、貴方は？」

「ん？ ああ……兜のせいでわからないか」

「あ、ジャガ丸くんの……」

「またあったね、アイズ・ヴァレンシュタイン」

兜を取って素顔を見せたミストに、アイズはジャガ丸くんの小豆クリーム味を食べていた人であることを思い出し、自分の名前を知っていることに首を傾げた。

『『剣姫』アイズ・ヴァレンシュタインと言えば、このオラリオで最強とまで呼ばれている女冒険者だそうじゃないか。色々な所で名前を聞けたよ』

「そう、ですか……貴女は？」

「三度目だし、名乗っておこうかな。私はミストルティン……ただの冒険者ミスただ」

自分と同じような金髪金眼を持つミストルティンに対して、アイズは勝手に親近感を覚えていた。同時に、自分を圧倒していた赤髪の女をあしらうように戦っていた女性冒険者である彼女に強さの秘密を聞きたい、という欲望が生まれていた。

「あの——」

「失礼。君はさっきの冒険者、でいいんだよね？」

「ん？」

アイズなにかを口にしようとした瞬間に、横から槍を持った小人バルウムが現れた。【ロキ・ファミリア】団長であるフィン・ディムナは、にこやかな表情を浮かべながらも目が笑っていなかった。舌戦は苦手なんだがと頭の中で愚痴を吐きながら、フィンの質問にミストは首肯した。

「君の力は少ししか見ていないけど、明らかに第一級冒険者と同等以上のものだった……でも、僕は君の顔にも名前にも覚えがない」

「当然だね。私はオラリオにきて……まだ数日だ」

「……そうか。わかったよ」

オラリオにやって来て数日で、ダンジョン18階層であるリヴィラへとやってくることが既におかしいのだが、フィンはこれ以上追及したところで答えが返ってこないだろうことを予測していた。直球で聞ければ早いのだが、少し離れた場所で聞いていたアイズとの会話から、なにかを隠していることを理解してフィンはわざと

聞かなかった。

「申し訳ないが先を急いでいてね。話ならまた今度にしてくれると助かるんだけども」

「……わかったよ。なら君のファミリアを聞いておきたい。それなら連絡も取りやすいだろう？」

フィンの言葉を聞いて、ミストは露骨に失策だったことを嘆くような表情を浮かべた。それは彼女がファミリアに所属していないことを決定づける証拠となった。フィンの変わらない笑みを見て、ミストは自分が彼によって意図的にはめられたことを理解して肩を竦めた。

---

蛮族に心理戦は不可能です(知力99)  
評価と感想頂けると嬉しいです

## ロキ・ファミリア

この辺にい、予約投稿の日付を間違えて、二話同時投稿した作者がいるらしいっすよ？

リヴィラの街にようやく平穏が戻った中、【ロキ・ファミリア】団長であるフィンと副団長であるリヴェリアは、戦いの最中に現れた謎の人物へと意識が向いていた。

「なるほどね……推定Lv・6の赤髪の調教師を一人で圧倒する力。確かに異常ではある」

「……剣から魔法のようなものを放っていたが、あれは魔剣ではない……だろうな」  
「そこら辺も気になるけど、一番怪しい部分は、彼女が【ファミリア】に所属していないことだ」

女体型のモンスターの半身を一撃で切断した謎の魔法と思わしきもの、アイズすらも圧倒された赤髪の女を逆に圧倒する力。何処を切り取っても異質な力としか言いようがない存在だが、顔を見たこともない冒険者となるとわかることが少ない。しかし、フィンは少しの会話から幾つかのヒントを得ていた。そのうちの 하나가、彼女が【ファミリア】に所属していないという点である。

「しかし、恩恵なしで18階層までやってくる……いや、Lv・6と同等以上の戦いができるものなのか？」

「違うよ。彼女はあくまで【ファミリア】に所属していないだけだ……恩恵は持っていると思いたいね」

「実態は同じだろう。オラリオの外でLv・6以上の力を持つ冒険者など」

「過去の人間だとしたら？」

フィンの言葉にリヴェリアは息を呑んだ。彼の言葉の裏側にある意味を理解したリヴェリアは、そんなことはあり得ないと口にしようとして思いとどまった。全員死んでいたと思っていた相手が、いつの間にかオラリオに帰って来ていたなどという経験を、フィンもリヴェリアも経験したことがある。

「……壊滅したのは15年も前の話だぞ？」

「だが、ありえない話じゃない。正直、今でも彼らの力を把握しきれていたとは言えないからね」

到底納得しきれない話ではあったが、フィンの言葉には確かな説得力が存在した。自分たちの知らないLv・7が存在してもおかしくない集団。15年前に壊滅したはずの【ゼウス・ファミリア】と【ヘラ・ファミリア】ならば彼らが知らない存在がいる可能性もある。

「……本当だとしたら今更なんのために戻ってきた？」

「さあ？ 案外……復讐みたいな簡単な話かもよ」

「馬鹿なことを言うな。そんなことを考えていたら……」

オラリオは再び暗黒期に向かってもおかしくない。そんな言葉を口に出せなかったリヴェリアは、フィンを黙って見つめていた。リヴェリアが今なにを考えていて、いつの光景を思い出しているのかも正確に理解しているフィンは、気休めの言葉すらもかけられなかった。

負けた。完膚なきまでとはいかないものの、攻撃は弾かれ受け流され、防御は意味をなさずに一方的に攻撃を受けてしまった。彼女の頭の中にあるのはそんな考えだけだった。

「……どうしたら」

彼女の名前はアイズ・ヴァレンシユタイン。オラリオで最強と名高い女性冒険者である【剣姫】その人である。しかし、今の彼女にはオラリオ最強の名前が重すぎた。冒険者でもない一般の民にも最強として名前を知られているアイズだが、リヴィラ攻防戦の最中に現れた謎の女に敗北を喫してしまった。敗北しただけならばまだしも、彼女はやられると思った瞬間に通りがかった冒険者に助けられてしまった。それも、同性である女性の冒険者である。

ミストルテインと名乗ったその人物は、地面に食い込むような重さの武器を片手

に持ちながら、アイズが苦戦していた女を軽々とあしらっていた。むしろ、自分を圧倒した相手がどれほどのものか楽しみしながら観察しているようにも感じられた。つまり、ミストにはそれだけの余裕があったのだ。自分よりも強い相手を圧倒するミストの力を思い出して、アイズは自らの身体が震えていることに気が付いた。

「怖い、の?」

自分の身体が震えている理由がイマイチ理解できないアイズは、久しく感じていなかった恐怖という感情が真っ先に頭に思い浮かんだ。同時に、彼女の脳内に浮かんだ情景は、5階層でミノタウロス相手に本気で恐怖していた白髪の少年と、過去の自分の姿だった。

「私は……あの人が怖い訳じゃ……」

アイズ・ヴァレンシュタインの身体を震えさせるその感情を、人は歓喜と呼ぶのだろう。貪欲に強さを追い求め続けるアイズにとって、目指すべき高みが突然目の前に現れたのだ。オラリオ最強の女性冒険者と呼ばれるようになって久しいアイズは、再び挑戦者となり目指すべき頂きの一部を目撃した。ならば後は我武者羅に挑

むだけである。

目指すべき高みを目撃した人が取る行動は2パターンしか存在しない。そこで心が折れて諦めるか、それでも抗い続けてその頂を目指して足掻き続けるかである。そして、ミストルテインが認めるベル・クラネル、その彼が追い求める至高の冒険者であるアイズ・ヴァレンシュタインは、当然後者の存在である。

今後の目標を自分の中で明確に定めたアイズは、一人で領いてから立ち上がった。差し当たって彼女が目指すべき場所は今の自分よりも上であるLv・6の位階。当然そこは通過点でしかないが、言ってしまうえば通過点とはいつかは通り過ぎなければならぬ道でもあるのだ。

「レベルを上げる方法……」

自分が今まで4回上げてきたレベルアップの方法を思い浮かべて、アイズは一つのことを思い出した。前回の出現からインターバルを計算すると、丁度数日後であることを思い浮かべ、これしかないとして一人で納得していた。

「……リヴェリアに怒られるかも。でも」

やると決めたアイズ・ヴァレンシュタインはもはや止まることはない。目標がで

きたのなら尚更のことである。

---

評価と感想頂けると嬉しいです



## アイテム作製

ベル・クラネルに、憧れている冒険者は誰かと聞けば頬を淡く染めて恥じらいながらアイズ・ヴァレンシュタインの名を口にするだろう。英雄を目指すベル・クラネルに憧れの英雄の名を聞けば、彼は興奮した様子で始祖アルゴノットの英雄の名を口にするだろう。そして、ベル・クラネルにとって最も強いと感じた者の名を聞けば、彼はおずおずと小さな声で答えるだろう。謎の銅騎士ミストルテインの名を。

冒険者ベル・クラネルにとって、ミストルテインというヒューマンは異質な存在だった。彼女は自ら神ファルナの恩恵を授かっていないと口にしていたにもかかわらず、当時のベルが苦戦する複数体のゴブリンを一蹴できる強さを持っていた。自分自身が恩恵を手に入れたことでモンスターを倒せるようになった関係もあり、ベルにとって常識であった、モンスターと戦うには恩恵が必要であるという考えが、ダンジョン内で壊されたことになる。子供の頃から数多くの英雄譚に憧れていたベルにとって、恩恵を持たずにモンスターと戦うというのは古代の英雄に通じる格好良さを感じさせた。同時に、古代の人間は彼女のように恩恵なしでモンスターと戦っていた

と考えると、寒気がしてくるほど恐ろしいことである。

力任せにナイフを振るうベル・クラネルは、現在7階層でキラアートを相手にしていた。自分の背後にはサポーターとして雇った少女、リルカ・アードがいる。魔石やドロップアイテムを自分で拾う必要がない分だけ、ベルは思い切ってモンスターを倒し続けていた。

「ベル様後ろからまだ来ます！」

「わかってる！」

手前から襲い掛かって来ていたニードルラビットを片付けたベルは、リルカの言葉に返事をしながら背後から近寄ってきていたキラアートの頭を切断する。同時に、再び足元へと這い寄って来ていたニードルラビットの身体に神ヘステイアのナイフを押し込み絶命させる。

「べ、ベル様すごい！」

「あ、あはは……ナイフの性能がいいからね」

謙遜するような言葉を口にするベルだが、事実として彼のステイタスでそこら辺のナイフでは、キラアートの外殻を容易く切断することなどできない。しかし、

彼の實力全てが神のナイフによる力かということでもない。たった数日前までゴブリンの群れに苦戦していた少年は、ステイタスだけで言うなら7階層で暴れているのも納得できる程に成長していた。

エルデの王となる道中、幾多ものデミゴッドを屠ってきたミストの目は本物だったと言えるだろう。ベル・クラネルは、既にどんな冒険者をも置き去りにする速度で強くなり続けていた。

「ただいまー……あれ？」

「なんだ？」

「もう起きてる」

既に廃屋と呼べるような見た目ではなくなっているほど修理されている家に帰っ

てきたミストは、扉を開けた瞬間に飛び込んできた光景に首を傾げた。扉の真正面、太陽が一日中当たらない場所に積まれている本棚から一冊の本を抜き出しているラニの姿が目映ったのだ。

「律を……エルデンリングを受け継いだからだろうな。人形の身体でありながらかなり自由に身体が動く」

「へえ……人形の身体は不便だって言ってたもんね」

最早顔馴染みとなった店から木の角材を買ってきたミストは、いつの間にか起きていたラニの姿を見て嬉しそうにしながら、部屋の中に角材を並べていた。

「……何をしている」

「本棚。自分で作ろうかと思って」

「そんなものは買ってこい」

ミストは無駄に凝り性で、狭間の地でも放浪の商人であるカーレから買い取ったツール鞆で色々な物を作っていた。だからと言って、店で買った方が絶対に良い物が手に入ると確信できる本棚など作るべきではないと、ラニは額に手を当てて溜息を吐いた。

「……なんだそれは？」

「これ？　なんか爆発する石」

ラニに言われて本棚作りを止めたミストは、ルーンとして己の内にしまい込んでいたドロップアイテムの石を並べていた。ほのかに光っているその石は、深層に現れるフレイムロックというモンスターのドロップアイテムである火炎石。強い発火性と極めて危険な爆発性を持つその石を見て、ミストはアイテム作製に使えるかもしれないと考えたのだ。

「ヒビ壺の中に二つ入れて、相手に投げるとか」

「ふむ……二つの石を壺の中で弾けさせるのか」

「精神力だって無限じゃないしね。いざとなったら背骨でも使えばいいけど」

ミストはラニに簡単な説明をしながら、ヒビ壺に入れていた。どれだけ割れても不思議と復元する魔術的な細工が施されているヒビ壺は、様々な素材や術を封じ込めて相手に投げつけることができる便利なアイテムで、狭間の地を走り回っていた時にもミストはよく使っていた。

「どれくらいの威力出るかな。人が消し飛ぶくらいできないかな？」

「ふ……そんな威力は自分で魔術を使え」

ラニに辛辣なことを言われて少し落ち込んだミストは、持っていた火炎石を全てヒビ壺の中に入れ終わった。ようやくアイテム製作が終わったことを察したラニは、無言でミストへと近づいて頬に手をつけた。

「……………どうしたの？」

「言わないとわからないか？」

「いやぁ……私ヘタレなんでわかんないです」

急に近づいてきたラニに驚きながら、ミストは自らの頬に触れる手に意識が向いていた。ラニが何を求めているのかを理解しながらも、羞恥心が勝ってミストは上手く踏み出せていなかったが、ラニの無言の圧力に屈して、指輪がついたラニの手を取った。

「おはよう、私の神<sup>ラニ</sup>」

「……………まあいいだろう。私の王<sup>伴侶</sup>、今回はこれで許してやる」

騎士が忠誠を誓うようにラニの手の甲へと唇を落としたミストを見て、満足そうにラニは頷いていた。

ミストにとってラニ以外の全てが二の次であるように、ラニにとってもミスト以外の全てなどどうでもいいことなのだ。

エルデンリングは既に霧の海の向こう側、狭間の地より彼方の地へと遠ざけられたのだから。

---

ラニ様、お目覚めです

睡眠時間、劇中で二日でした

ラニ様が目覚めたので、ダンジョン探索はかなり少なくなります

評価と感想頂けると嬉しいです



## 道半ばの英雄

「当然だな」

「えー」

定位置の椅子に戻ったラニへ、最近あったことを全て話したミストへの返答は呆れたものだった。

ダンジョンの50階層付近まで降りたが満足するような相手はおらず、少し気落ちしながら18階層まで戻ったところで新たな敵と出会うも、膂力を圧倒された程度で臆して逃げ出すような敵だったこと。全てを話したところで、溜息を一つ吐いたミストに対して出したラニの返答がこれである。

「そもそも、お前が戦った相手に英雄と呼べるだけのものはいいたか？」

「モンスターなんだからいないよ」

「そういうことだ」

ラニからすれば当然の結果でしかないのだが、神々が降臨した地であるオラリオに過剰な期待を向けているのがミストである。とは言え、知っている者全ての命が

消えていく狭間の地において、彼女と碌なコミュニケーションを取ってくれた相手が少ないので仕方ないことではある。コミュニケーションが取れ、神の力を一端とはいえ取り入れた冒険者に実力を期待するミストの気持ちも、ラニは少しは汲んでいた。

「都市最強と呼ばれる男に手を出してみたらどうだ？」

「あー……おうじゃ猛者オツタル、だっけ」

オラリオ二大派閥の片側【フレイヤ・ファミリア】の団長にして、オラリオ唯一のLv・7冒険者であるオツタル。都市の中で最強の冒険者は誰かと聞けば、誰もがその者の名前を口にする真の最強。だが、ミストとしてはあまり乗り気ではなかった。

「そのオツタルとやらは主神絶対主義なんですよ？ なんでも傍からずっと離れないとか……腑抜け過ぎじゃない？」

「不満か？」

「伊達に都市最強と呼ばれてないだろうから、力はあると思うよ。だけど……神に依存した存在とやり合って、楽しいと思えることはないだろうなあ」

ミストの瞳に浮かぶ感情は明らかな失望。破碎戦争最強のデミゴッドと呼ばれた星砕きの將軍が、朱き腐敗で正気を失っていると聞いた時や、不敗の剣と呼ばれたデミゴッドが腐敗に抗わず双子の刃に成り下がっている姿を前に見せたものと同じ。その失望に満ちた瞳は、勿体ないと雄弁に語っていた。

ラニはミストの内心を悟って薄く笑みを浮かべた。どんな世界にいても、自らの隣に立つ伴侶たる王は変わらない。それを感じられただけでラニとしては満足なのだ。

「ならば、未だ討伐されていないと言われているこの世界の終末などはどうだ？」

「終末……黒竜のこと？」

「そうだ。かつてこの都市最強を誇っていた二つのファミリア、同時に挑んで壊滅したそうだな」

ラニの語る黒き終末の名を聞いて、ミストは少し考えるような仕草をしてから首を横に振った。力を持つものとしては充分であり、エルデの王となった今のミストが挑んでもそう簡単には倒せない敵なのかもしれない。だが、ミストは黒竜に挑むつもりなど全くなかった。

「何故だ？」

「その終末を倒すのは、エルデ私の王の役割じゃない」

どこか遠くを見るような目で微笑むミストの脳裏には、今もダンジョンで必死に足掻いている冒険者の姿が映っていた。

「っ!? やあッ！」

『ギユギイ!!』

「ベル様追加で2匹来ます！」

「わかった！」

キラアートを切り裂いたベルは、続けざまに近づいてきたパープル・モスの首を切断し、追加でやってきた2匹のキラアトへ視線を向ける。

(違う……あの人はもつと速かった！)

ベル・クラネルの脳裏に思い浮かぶ金色アイズ・ヴァレンシュタインの憧憬は、キラーアント程度に手間取ることはない。

カチカチと顎を鳴らしながら威嚇しているキラーアントに、自分から突っ込んでいったベルは、鞭の如く放たれた前脚の攻撃をプロテクターで弾く。緑色のプロテクターから生まれる火花を尻目に、神ヘステイアのナイフでキラーアントの魔石を砕く。

「ベル様危ない!?」

(あの人はもつと、冷静で力強かった！)

脳裏に思い浮かぶ自分ミストルティンを認めてくれた人は、複数匹の魔物を前にしても全く動じることなく、ベルに危険が及ぶ前に全てを屠っていた。

巨大な顎でベルを噛み砕こうと迫るキラーアントをいなし、硬い甲殻を切り裂いて首を跳ね飛ばす。同時に、足元に迫っていたニードルラビットの攻撃を避け、カウスターとして繰り出されたナイフが魔石を穿つ。

「す、すごい……一回も攻撃を受けずに……Lv・1の冒険者ができることじゃないですよ！」

「あはは……ありがとう」

称賛するリリルカ・アーデの言葉に笑いながら、ベルは一人で悔しい思いをしてきた。アイズ・ヴァレンシュタインの動きを思い出して動いてみても、想像通りに身体はついてこない。ミストルテインの動きを思い出してみても、彼女の圧倒的な判断能力には追いつかない。

キラアントは倒せた。ニードルラビットもパープル・モスも問題にはならない。だが、本当に強い相手と戦った時に、果たして自分は勝てるのだろうか。ベル・クラネルの頭には、未だ恐怖ミノタウロスが焼き付いていた。

(このままじゃ……あの日、馬鹿にされた自分のままだ)

酒場である『豊穣の女主人』で【ロキ・ファミリア】やその他の冒険者たちに笑われた自分のまま、何も変わっていない。力は格段に強くなり、武器だって立派なものを買っている。だが、ベル・クラネルにとって恐怖の象徴であるミノタウロスが思い浮かんで仕方がない。

「こんな僕でも……まだ英雄の素質があると言ってくれますか。ミストさん」  
オラリオにきて初めて自分が英雄の器であると認めてくれたミストを思い浮かべ

て、ベル・クラネルは苦笑を浮かべた。

---

ベル君、踏み出したばかりの英雄です  
評価と感想頂けると嬉しいです



## 給仕

ラニが目を覚ましたことでしばらくダンジョンに潜らないことにしたミストは、気分転換に外食をしに来ていた。褪せ人となったミストにとって食事など本来必要のないものなのだが、娯楽的な感覚が抜けずにミストは定期的に人間らしい食事を求める。

既に太陽が地平線の彼方へと消えた頃に家を出て、冒険者通りと言われるオラリオ北西区画へとやってきたミストは、儲かってそうな大きな店へと入る。店の名は『豊穡の女主人』である。

「ふーむ……美味しい。こんなに美味しい食事をしたのは随分と久しぶりだね」

「そうかい。客に褒められて悪い気分にはならないね。金さえ落とせば」

「ふふ……はつきり言うね」

料理の美味しさに舌鼓を打っているミストに、豊穡の女主人の店主であるドワーフのミアは、美味しそうに出された料理を食べていくミストを見て苦笑を浮かべていた。男の冒険者数人分を食べているミストに呆れながらも、金を落としてくれる

のならば問題ないと思つてそのままミアは調理に戻つた。

現在は私服姿のまま酒場までやってきているため、周囲の冒険者からはかなりの好奇と下種染みた視線を向けられていたミストだったが、男冒険者数人分を食っている姿を見て半分くらいは去つていった。

「ご注文の果実酒です」

「ああ……ありがとう給仕さん」

「いえいえ。ごゆっくりどうぞ」

果実酒を運んできた美しい給仕に微笑んだミストは、あどけないヒューマンの少女から匂う独特な存在感を察知していた。その彼女が今、誰に夢中になっているのかをさっくりと察したミストは、楽しそうな笑みを浮かべたまま、美しい給仕の少女を手招きした。再び注文するのかと苦笑した表情のまま近づいてきた少女、シル・フローヴァにミストは美しい笑みを見せた。

「この魚料理っばい奴とお茶を貰えるかな」

「かしこまりました」

想像通りの再びの追加注文に、本当によく食べるなと思ひながら注文を受けて離

れようとした瞬間、ミストはシルの腕を掴んだ。

「彼は、いつ己の器を昇華させると思う？ 君がもう一度ちよっかいを出してもいいんだよ？」

「っ!? な、なんのことか私には」

「ふふ……私も、彼には強くなって欲しいんだ……なにかあったら言ってよね。協力してあげるから」

怪しく笑いながらシルを解放したミストは、シルから顔を逸らして食事に手を付け始めた。茫然とした表情のままミストの方を見つめていたシルは、ある一点に気が付いてその目を見開いた。しかし、さっきの今で謎の存在であるミストに話しかけに行く勇気がなかったシルは、数秒間その場で唸っていた。

「どうかしたのですか、シル」

「りゅ、リユー……なんでもない、よ」

「ならいいのですが。あの人がなにか？」

シル・フロヴァの同僚であるエルフ、リユーが訝し気に話しかけてきたことでシルは彼女を見つめることをやめた。少し詰まりながら誤魔化そうとしたシルだ

が、元冒険者であるリューにはシルがどこを見ていたのかなどお見通しだった。

「ううん。なんでもないの。ほら、よく食べるなーって」

「それはそうですね。あれ程の大食漢もあまり見ません」

「シル、サボってんじゃないよ」

「は、はーいっ！」

なんとかリュウを誤魔化すことに成功したシルは、離れていくリュウの後ろ姿を見ながら溜息を吐いた。再び思考の海へと落ちそうになっていったシルは、奥から聞こえてきたミアの声に反応して即座に動き始めた。この豊穡の女主人で最も権力の強い存在であるミアには、シルも当然敵わないのだ。

「美の女神かー……どう思う？」

「くだらん」

「だよね」

美味しい料理も食べてご機嫌なミストは、裏路地を歩きながら隣に現れていたラニへと言葉を向けたが、返ってきた言葉は辛辣なものだった。そもそも神という存在が極端なまでに嫌いであるラニにとって、美の女神だろうがそうでなかりうが関係ない。神という存在が等しく苛立ちの原因にしかならないのだ。

「この世界の神は大いなる意志にも操られてないし、自由そうだけどね」

「だが徒に世界を乱し、国を乱し、人を乱し、拳句の果てに高みから一方的に語り掛ける。そんなものは腐り果てた二本指となにも変わらない」

「まあそんなもんだよね」

ラニが神を嫌う原因の一つである二本指の名前が出たことで、ミストはこれ以上はなにを言っても無駄だろうと考えて話を切り上げた。

「彼はいずれ本物の英雄になるよ。彼女をも超えて、ね」

「……お前も英雄だろう」

「私は英雄じゃないよ。ただ負けなかっただけ」

ベル・クラネルのことを思い浮かべて楽しそうな笑みを浮かべるミストに対して、露骨に機嫌を悪くするラニ。

ミストは自らのことを英雄ではないと普段から口にはしているが、それは彼女の持つ哲学によるところが大きい。そもそも彼女の持つ英雄像とは、正義を成し悪しき者にも手を差し伸べる救世主と呼べる存在である。そんな英雄像と比べてしまえば、狭間の地で敵対する者全てを切り捨てた自分は英雄ではないと言ってしまいうだろう。

「なら私の英雄だ。私の王……お前は私が独りの道を歩もうともついて来てくれただろう？ それは私にとっての英雄だ……それでいいだろう」

「……そっか。じゃあ私は民衆の英雄じゃなくて、ラニの英雄だね」

「それでいい。お前は、私だけの王なのだからな」

民衆の英雄など人々から希望を押し付けられる者に名前を付けたに過ぎない。ラニはミストには告げず、心の中でだけ英雄という存在を否定していた。

ミストちゃんはラニ様だけの王様で、ラニ様だけの英雄です

評価と感想頂けると嬉しいです



## 魂

「彼女は何者なのかしら」

迷宮都市オラリオの中心に聳え立つ白亜の塔。その頂上付近に居座り、オラリオを一望している女神は銀の髪を揺らしながら街中を歩く一人の女性を視界に捉えていた。少しくすんだような色の金髪を揺らしながら歩く女性は、冒険者としてギルドに登録されていない存在。

名をミストルテイン。

「知りたい……彼女の全てを」

先日、とある酒場で起こった出来事を思い出しながら、美の女神フレイヤは街を歩く彼女の姿をしっかりと見つめた。

女神フレイヤにはある特技のようなものが存在する。それは下界の子供たちの魂の色を見抜く力。英雄としての素質のあるものは輝きを増し、その魂の濃さによって力を量ることができ、その魂の色を見ることによつて生き方を知ることができる。異端としか言いようのない存在であるミストのことが気になって仕方がないフレ

イヤ。その在り方は好奇心に突き動かされる超越存在デウスデア特有のものと言っていていいだろう。ゆっくりと瞼を閉じ、再び開けた彼女の瞳に映るのは魂の世界。あらゆる下界の子供たちの魂が見える特別な世界の中、ゆっくりとミストの方へと視線を向けたフレイヤ、次の瞬間に目を逸らした。

「……な、なにが？」

「フレイヤ様？」

白亜の塔バベルからオラリオを見下ろす普段通りであった主神が、急に全身から発汗させて手に持っていたワイングラスを取り落としたことに、傍で護衛として待機していた【フレイヤ・ファミリア】団長オツタルがすぐに近づいてきた。明らかに動揺しているフレイヤの姿に困惑しながら、オツタルは硝子の外へと視線を向ける。沈みゆく太陽がオラリオを染めている以外に普段との違いがないが、フレイヤはこの景色の中から動揺するなにかを見てしまったのだ。

困惑して右往左往するオツタルに対して反応できない程、フレイヤの脳内は混乱していた。彼女はミストレインの魂の色をその目で確認した。確かに見ていたのだが、その姿に動揺してしまったのだ。

(美しく輝き決して手の届かない、夜空の月の様な色だった。彼女の輝き一つで周囲の全てを見えなくしてしまうほどの輝き……オツタルですらこんなに輝くことはない)

間違はなく、フレイヤが視てきた中で最も優れた魂の持ち主であると言って差し支えない。フレイヤの目は、ミストルテインという存在がオラリオにおいて最強であることを的確に見抜いた。しかし、それ以上にフレイヤは見てはいけぬものを見てしまうとところだったのだ。

(あの……魂は、見てはいけぬ。覗き込んでしまえば、二度と戻れない深淵の闇)

フレイヤの手が震えていた。動揺によるものであるとオツタルは思っているが、フレイヤが抱いている感情の名は「恐怖」である。

夜空に浮かぶ月のような魂を持ちながら、覗き込めば二度と這い上がることでない底なしの深淵を持つ者。魂を見定め、気に入った勇者を自らの虜とする美の女神が、初めて魂を見て恐怖した。その魂には底なしの闇が広がり、覗き込む者がいれば全てを引きずり込んで自らの糧としてしまう。そんな未知の存在に対して、

好奇心よりも恐怖心が勝ってしまった。

「……本当に、何者なのかしらね」

神をも喰らいかねない深淵を持つ月の魂の持ち主に、フレイヤはそっと呟いた。

「不快な視線だな」

「可愛いじゃん。未知が気になって仕方がない神特有の感性でしょ？　それで、私を覗き込んで震えてる」

共に街を歩く伴侶の不機嫌そうな声に対して、ミストは上機嫌なまま微笑んでいた。彼女の中に渦巻く深淵の如き闇は、彼女が積み重ねてきたルーンによるものである。デミゴッドを殺し、古竜を喰らい、神をも打ち砕いた彼女の魂は、既に神であろうとも触れてはいけない深淵のルーン。そんな深淵の一端を覗き込んで震えて

いる美の女神に、ミストは笑っていたのだ。

「可愛い、だと？」

「ごめんなさい」

自分は言われたことがないぞと言わんばかりの視線とドスの利いた声を囁かれ、ミストは即座に謝った。そもそも、今となっては律を持つ神たるラニに対して、人間の恋人のように可愛いね、と愛を囁く方が間違っているだろうと、ラニを自らの神のように崇めるミストは思っている。しかし、ラニ自身はミストのことを伴侶として、なにより自らの王として大切に愛おしい存在だと思っっているらしく、空気感の違いでミストに対する不満をぶつけることがある。

「善処します」

「聞き飽きたぞ」

「申し訳ありません」

明らかに不機嫌なまま歩き続けるラニに、ミストは苦笑いを浮かべた。自らの神として崇めているとはいえ、ミストも世界を犠牲にしても隣を歩み続けることを選択する程度には、彼女のことを愛している。とは言え、やったことが所詮蛮族と

しか言いようのない自分が、ラニに対してどこまで愛を囁けるものかと自己嫌悪に陥っていつも足踏みをしている。それに対して苛立ちを抑えきれないラニによって、色々な意味で襲い掛かられるのがミストの悩みであるのだ。

震える美の女神など既に思考の隅に追いやり、ミストはどうやってラニの機嫌を取ろうかと頭の中で四苦八苦していた。

ふしんちゅだったら暗い深淵の渦で、一端でも見てしまえば引きずり込まれそうですが、あせんちゅはまだまともなので大丈夫です

評価と感想頂けると嬉しいです

## 闇派閥

ダンジョン18階層の人目に付かない森の中、リヴィラの街から離れた場所に位置する祝福で武器に触れていたミストは、近づいてくる足音に反応して顔を上げた。坩堝の騎士の鎧を全身に纏う彼女の顔は、やってきた3人の男にも見ることはできないが、彼らはその中身が金髪金眼の美女であることを知っていた。

「お前が、最近噂の大仰な装備を着た騎士か」

「……よくここがわかったね」

「そりゃあそうだろう。俺らはお前を追っかけてたんだからよ」

明らかに堅気の雰囲気ではない男3人を前にしても、ミストは立ち上がることもせずに武器の手入れに顔を戻した。祝福に近づいてくる者に警戒を持っていたミストだが、それが目の前のくだらない者たちだと知って興味が失せたのだ。男はミストの反応に苛立ちながらも、手を出すことはせずに後ろにいた男から紙を受け取った。

「ほらよ。お前宛てに手紙を預かってんだ」

「そんな顔では郵便業もさぞ大変だろう。客に怖がられてサインも貰えないのかな？」

「それ以上余計なこと言うとマジで殺すぞ」

「それは遠慮願いたいな」

肩を竦めるミストに対して本気で武器に手が伸びかけた男を、背後の二人が慌てて止めた。やるなら手紙を読んで答えを聞いてからにしろ、と手紙の主からは命じられているのだ。ここで答えを聞かずに殺せば、責められるのは自分たちになる。結局襲い掛かってくることもない男たちに溜息を吐きながら、ミストは差し出された手紙を受け取ってざっと目を通した。そこに書かれている文章を見て鼻で笑ったミストは、視線を上げて男たちを見た。

「それで、私に味方になれと泣き付きに来たのかい？」

「ああ!？」

「落ち着け……志を共に歩まないかと言っているだけさ。君はどうやら向こう側の冒険者ではなさそうだったからね」

怪しげな笑みを浮かべる男に対して呆れたような笑みを浮かべるミストは、もう

一度手紙に視線を落とした。そこに書かれている勧誘の文言を数度見返してから、手紙を男に突き出した。

「私に対するメリットが書かれていない。君たちについてなにか私が得するのかい？」

「……混沌だけでは足りないか？」

「馬鹿か君は？ 混沌を求めるなら私一人で充分だろう……闇派閥イツイルスともあろうものが彼我の戦力差も計算できないのか？」

手紙の中身は闇派閥に來いという勧誘である。普通の冒険者と違い、ダンジョンで手に入れた魔石とドロップアイテムをギルドに流さず、裏の市場に流しているのが何処かしらから漏れ、流れている素材が深層域からのものであることに気が付きミストを追っていた。真相はこんな簡単な話である。

ミストにとってオラリオなど住んでいる場所でしかない。ダンジョンはなにをやっても修復する以上、オラリオを完膚なきまでに破壊してもダンジョンは残り続ける。ミストの好奇心を満たすために、迷宮都市オラリオの存在は必須条件ではないのだ。ただし、彼女はメリットがなければオラリオを滅ぼすこともない。故に、

闇派閥の勧誘に全く興味を惹かれないのだ。

闇派閥全体に対する侮辱とも取れる言葉を吐かれ、3人の男は一気に殺気立った。深層域に潜っているとはいえ、闇商人が市場に流している素材は精々37階層付近までである。そしてミストを囲んでいる男たちはランクアップ報告をギルドに行っていないだけで、全員がLv・3に到達している冒険者であり、下層でも通用する力を持っている。

「凶に乗るなよ。お前は「はい」か「いいえ」のどっちかを答えればいいんだ」

「それで、いいえと答えたら殺す。はいと答えたら顎で使う……わかりやすい連中だな」

闇派閥の主神が誰かは手紙に書かれていなかったが、目の前の3人を派遣した時点で、こうなることは想定済みなのだろうとミストは考えた。つまり、自分たちの邪魔になるのなら消し、味方になるのなら上下関係を叩き込む。理に合った方法ではあるが、前提条件としてミストが男3人と同時に戦って負けることが含まれている。

「保留だよ。条件提示によっては考えておく」

「……後悔すんなよ」

「もうここで殺ればいいだろうがよ！」

明らかに闇派閥を舐めた態度を取っている騎士気取りの女にイラつきながら抜剣したが、再び一番前にいた男に止められる。視線だけで何故止めるのかと語る気の短い男に対して、溜息を吐いて最後の忠告と言わんばかりに口を開いた。

「敵に成るなら殺せと言われているが、なるべくなら引き入れろと言われている……条件ぐらいいは持って来てやる」

「ならさっさと消えてくれないか？ 話なら私が利用している商人の所で聞いてあげるよ」

「ちっ！ さっさと行くぞ！ 不愉快だ」

離れていく闇派閥の連中を見送って、ミストは一人で笑っていた。オラリオに混沌を齎すと言いながら活動していると聞いていた連中を実際に目で見て、ミストは笑いが自然と溢れて止まらなかつたのだ。なにせ、彼女の知っている混沌狂信者を求める者たちと言え、世界の生命を全て否定しようとするイカれた狂い火なので仕方のないことである。

闇派閥が自己満足の刹那的な快楽を求める、実にくだらない集団でしかないことを確認したミストは興醒めしていた。彼らがもし、もっと面白いことを企んでいたのならミストも協力していたかもしれない。例えば、いつまで経っても英雄が生まれにくいことに業を煮やして、自らが踏み台になって英雄を生み出す、などである。だが、ミストが知らないだけでそんな思想を持っていた者たちはもう7年も前に死んでいる。

自らの快楽を求めるだけの存在に屈するほど、オラリオの冒険者たちも弱い。ミストはくだらないと思いつつも彼らの存在の滑稽さにもう一度笑みを浮かべていた。

死の七日間だったら絶対に闇派閥側についていますが、結局腑抜けた冒険者に興味を失って戦うのを途中で止めるか、闇派閥ごとオラリオを滅ぼしていると思うので、ベル君がいてよかったです(他人事)

評価と感想頂けると嬉しいです



## 条件契約

いつも通り黒き刃の装束を纏って闇商人の元へとやってきたミストは、特に魔石もドロップアイテムも持っていなかった。普段は売る時にしか立ち寄ることのないミストの用のない訪問に、訝し気にミストを見つめていた商人が、しばらくして店にやってきた男たちを見て溜息を吐いた。

「よう、久しぶりだな……ネブラ」

「……なんの御用でしょうか？」

「そう邪険にするなよ……俺らに商品卸してくれる貴重な商人だ。仲良くしようぜ？」

ネブラと呼ばれた商人は、頭を抱えなくなる衝動を無理やり抑えつけた。彼が面倒に思っていた闇派閥に勧誘してくる人物こそが、目の前の男なのだ。チラリとミストの方へと視線を向ければ、闇派閥の男は睨みつけるようにミストを見た。

「お前の我儘、許してくださるとよ。主神様に感謝しろよ」

「へえ……神を敬うようなやつには見えなかったけど、様はつけるんだ」

「うるせえ！」

闇派閥に所属している連中は基本的に喧嘩早い者ばかりなのは当然だが、話し合  
いの場においてここまで声を荒げて嘔みつくことはない。奴らは快楽的な犯罪者集  
団ではあるが、突発的な計画性もない馬鹿とは違うのだ。そんな彼らが声を荒げて  
今にも剣を抜きそうな程の敵意を向けるのは、十中八九相手方にイラついている時  
だけだろう。商人は溜息を吐きそうになって慌てて飲み込み、存在感を極力出さな  
いように少しづつ後ろに下がっていた。

「大概の条件は呑んでやると言っていた。さっさと条件を言え」

「なら1つ目。【ヘステイア・ファミリア】のベル・クラネルという冒険者にこち  
ら側から手を出さないこと」

さらっと条件を2つ以上提示しようとしていることに、握り拳が白くなるほど  
強く握り込んでいる男を無視して、ミストは条件の一つを提示した。それは冒険者  
ベル・クラネルに手を出さないことであった。

「ああ？ 誰だそりゃあ」

「君たちが知る必要はないけど、その内噂にでもなるだろうさ……ああ、向こう側

から手を出してきたなら遠慮なく潰せばいい。そこに関しては何も言わない」

闇派閥との戦いは未熟な英雄の器であるベル・クラネルには、いずれ必要なステップであるとは思っているが、今はまだ早い段階である。当然、ベルの方から手を出すというのならばミストは口出ししない方針であるが。

「……まあいい。知らねえってことはLv・1だろう？ 誰が好んで金も持ってねえ奴に手を出すかよ」

「ならいい。条件の2つ目は、私のやることに干渉しないことだ」

「あ？ そりゃあお前が裏切るような真似してもってか？」

1つ目の条件は全く知らない冒険者が相手であることから無視したが、2つ目の条件は場合によっては裏切り行為への保身にしかならない。当然そこを見逃すことのない男は、剣の柄に手を伸ばしかけるが、ミストは微笑んだまま首を横へ振った。

「別にそこまで言っていない。ただ、私がお前達よりダンジョン探索を優先させても文句を言うなというだけの話でしかない」

「けっ……闇派閥がダンジョン探索かよ」

「そもそも闇派閥に協力してやるだけで、派閥に入った訳ではないんだがな」

「どっちでもいい。同罪じゃねえか」

少しでも加担している時点で自分たちと同罪だと語る男に、ミストは驚いたような表情を見せた。まさか闇派閥を名乗って活動している連中が、罪であることを考えて行動しているとは全く思っていなかったのだ。罪であると認識して行動することと背徳感に浸っている者もいるだろうが、少なくともミストの前にいる男は、ただのごろつきにしか見えなかった。

「最後の条件、3つ目は私に命令するな。私の気分が乗らなかつたら手伝わないけど、気分が乗れば呼ばれなくても手伝ってあげる。簡単な話でしょう？ 勿論、協力するという約束をしたからには基本的には手伝ってあげるつもりだけど」

「……いいだろう。それぐらいなら想定内だ」

想定の中でも最低なものが出てきたという顔をしながら納得する男に、ミストは吹き出しそうになっていた。彼は闇派閥の中でも、比較的常識を持って主神にもある程度の信を置いているのだろう。だからこんな末端の捨て駒に使われる。

数回の会話によって彼が闇派閥内の雑用、捨て駒となっていることを見抜いた

ミストは、逆にそれを利用してしまえばもっと楽しいことになるかもしれないと考えた。

「君、名前は？」

「あ？　言う訳ねえだろ……俺は闇派閥で、お前はただの協力者だぞ？」

「いいね、益々気に入った。君はこの後殺されるだろうけど、それを助けてあげると言ったら名前を教えてくださいるのかい？」

「殺さ、れる？　なんの話をしてやがる！」

男はミストが何を言っているのかまるで理解できなかった。なにせ、彼は真つ当な方法ではないとしてもLv・3に到達している冒険者であり、オラリオ全体から見れば上位層に位置する実力者なのだ。そんな自分が消されるなど、実力的にも自分の有用性を考えても信じられるものではなかった。しかし、ミストの目は冗談を言っている人間の目ではない。

男がここでミストに名前を告げること。それはミストが男の命を握ることに他ならない。

闇派閥に所属している登録されていないLv・3など、捕縛してギルドにでも引き

渡せば一定の謝礼金は貰えるだろう。なにせ拷問すれば数多の情報を得ることができ、きるかもしれないのだ。特に今は時期が悪く、先日行われた怪物祭モンスターファイリアの事件との関連性なども含めて、ギルドと秩序維持を行っている【ガネーシャ・ファミア】は威信をかけて闇派閥を潰そうとする。そうなれば男に待っているのは、拷問される前に闇派閥の連中に暗殺されるか、ギルド側に拷問の果てに無惨に殺されるかである。

生き残る選択肢は2つしかないと言える。1つはミストの提案を蹴って、オリオから逃げ出すこと。2つ目は、信用できない女の言葉ミストに頷き守ってもらおうこと。そして、実質的に選択できることは1つだけである。

「お、それは……スコット……スコット・スキアーだ」

死の恐怖に屈した男を見て、ミストは一人で微笑んでいた。

スコットさんが裏で消されそうな理由は次回で書く予定です

評価と感想頂けると嬉しいです

## 強者と弱者

感想で聞かれましたが、ミストちゃんはベル君が英雄になるのを見たいだけです  
単純に英雄と呼ばれる存在を見たことがないから見てみたいという知的好奇心に  
突き動かされているだけです

ミストちゃんはオラリオの神様と同じ、知的好奇心を満たせばなんでもいいの  
です

ただ、ラニ様という自分の命よりも大事なものがあるだけです

「なんで……俺は消されるんだ？」

「君、私の勧誘以外にも最近は何事を任せられているんじゃない？ 情報漏洩の  
観点からって簡単に消されそうだなって」

「……そんな、こと」

「心当たり、あるみたいだね」

闇派閥の男、スコット・スキアーはミストの言葉を聞いて顔を青褪めていた。今まで雑用程度しか任されていなかったのに、急に仕事を割り振られたのは事実だった。しかも彼は24階層に存在する食料庫パントリーで悪巧みを続けているある集団との架け橋の役割をさせられている。その仕事もそろそろ終わりが近いこともあり、今から消される可能性はミストのでたらめではない。

自分で納得して青褪めていくスコットを見ながら、ミストの意識は店の外に向いていた。闇商人、ネブラが店として使っているこの建物は、実際はただの廃屋ではない。足が付かないように数多もの仮店舗を持っているネブラが用意した1つだが、ミストは既にその店の外から感じる気配に意識が向いていた。

(……ただの冒険者じゃない。まるで迷宮のモンスターののような気配、というか生命力?)

近くにある生命力の力をルーンによって把握していたミストは、店の前にはダンジョンで出現するモンスターと似たような気配を感じ取っていた。これにはミストも首を傾げざるを得ない。自分のことは索敵があまり得意な方ではないと自覚し

ているミストだが、殺気や敵意には人一倍敏感である。故に、店の外にいろうらうら派閥の刺客に気が付ける。しかし、いくら治安の悪い迷宮都市オラリオと言えども、ダンジョンからモンスターが街に出てきたら大騒ぎになることは間違いない。つまり、店の外にいる敵は必然的にモンスターではないのだが、ミストの本能はその敵がモンスターであると囁くのだ。

「得体が知れない奴が外に、もういる。最悪この店の商人ごと消し飛ばすつもりだろう」

「私ですか……厄介なことに巻き込まれましたねえ」

「後で頼みぐらいなら聞いてあげるから我慢してください」

「それなりの依頼をさせていただきますよ」

「いいね。商売根性に命をかける姿勢、嫌いじゃないよ」

ネブラの言葉に対してにっこりと笑みを浮かべたミストは、そのままなかの対策をする訳でもなく店の扉を開けた。同時に、数人の人影がミストへと向かって襲い掛かってくる。それぞれ顔を隠していたが、全員が明らかに店から出てきた人間を殺す為に動いていた。

「ほい」

最初にミストへと刃を向けた相手を適当に片手でいなし、奥からやってきた敵に向かつてミストはヒビ壺を投げた。暗闇の中、正確に何を投げられたのかを視認できなかった暗殺者は、ヒビ壺を手に持っていた刃で叩き割る。元々ひび割れている壺のため、少しでも攻撃を加えれば簡単に割れてしまうが、その衝撃は中に入っていた火炎石が反応するには充分だった。

「おー……思ったより……」

呆気なく身体の上半身を吹き飛ばされて死んだ仲間を見て、ミストを囲うように展開していた暗殺者たちの間に動揺が走った。その隙を見逃さず、ミストは再びヒビ壺を敵に向かつて投げつける。先ほどの光景が頭にこびりついていた敵は、大袈裟にヒビ壺を避けて距離を取った。

「誰が差し向けた暗殺者なのか聞きたいところだが……2人いれば情報は聞き出せるか？」

「拷問用のアイテムも存在しますからね。2人で充分ですよ」

大袈裟にヒビ壺を避けた暗殺者は、背後から近寄っていたミストによって急所を

貫かれ、既に絶命していた。避けたヒビ壺には何も入っておらず、ただ避けさせるためだけに投擲した空き壺である。

ミストが手に持っている短剣は『慈悲の短剣』と呼ばれる武器である。白衣の従軍医師が用いる短剣であり、人体に致命的な損傷を与えることに優れていた。戦場における慈悲とは、即ち介錯のことである。

簡単に殺せると思い込んでいた暗殺者たちは、一瞬にして2人を殺されたことで暗殺の機を逸していることを察していた。依頼が失敗という形で終わってしまった。暗殺者という存在は生かしてもらえないのかすらも危うくなってしまふ職業である。故に、暗殺者たちに残された選択肢は、このまま逃げ帰って処理されるか、怪物の前で自害して情報を渡さないかである。そして、ミストを襲った敵は練達の暗殺者たちであった。素早く自らの武器で首を貫き、そのまま横に掻っ捌いて自害する様をミストはつまらなさそうに見ていた。

「……くだらん矜持だ」

「おや？ 潔さを認めると思っていました、違いましたか？」

自害した暗殺者の頭を足蹴にしながら、ミストは失望の言葉を呟いた。闇商人と

して色々な人間を見てきたネブラは、戦士であるのならばミストも潔さを褒めるぐらいはするのだろうと思っていたが、彼女の持つていた感情は明らかかな失望だった。

「私は強者が好きだ」

「自らの死によって情報を相手に与えないことは強者ではない、と？」

「そんな複雑な話じゃない。生きてるやつが強者で、死んだやつは弱者だ……それ以外は存在しない」

狭間の地で何回も死にながら戦い続けたが故の、ミストが持つ持論。極端に生に縋りついた者が苦し紛れに吐くようなセリフを、強者であるミストが口にする可笑しさに、ネブラとスコットは反応できなかった。

「無様でも這いつくばっても、諦めずに立ち上がり続けた奴が強者で、自らに諦めを見つけて座り込んで死んだやつが弱者。わかりやすくいいだろう」

「諦めない者が強者、ですか。成程、とてもいい持論だと思いますよ」

「心にもないことを……」

胡散臭い笑みを浮かべたまま頷く闇商人に対して、ミストは呆れたような溜息を吐いた。

## 『取り逃ガシタカ』

暗殺者たちの死体を眺めながら、ローブを纏った影は静かにミストが歩いて行った方向へと視線を向けた。ミストが助けたスコット・スキアーという男は、24階層の食料庫で行われている悪事の目的を知らなくとも、その詳細を知っている。消せる時に消しておけとの命令を受けていたが、まさか保護する者が現れるとは思わなかった。

一瞬だけ見せた戦闘能力だけで、既に他を圧倒する力を感じ取っていた仮面の人物は、自らに命令した上の存在にその力を報告する必要性を感じていた。

都市に根付いた悪には、未だ誰も気が付かない。

50回死のうが100回死のうが、最終的に相手を殺せれば自分の勝ち  
エルデンリングを攻略するのに最も必要な精神だと思えます  
レベル上げすれば一周目なんてなんともなりますけどね

評価と感想頂けると嬉しいです

非ログインユーザーでも感想を書けるように設定しました  
色々な感想を頂けると嬉しいです

## 天敵

「やあ、奇遇だね」

「……一番会いたくない奴にあったな」

「嫌われた、のかな？」

オラリオの中心に聳え立つ白亜の塔バベルの内部で、ミストは会いたくない人物と顔を合わせていた。『勇者』<sup>フレイバー</sup>の二つ名を持つ【ロキ・ファミリア】の団長、フィン・デイルムナであった。

バベルの中には冒険者向けの施設が複数入っているという話を聞いて、装備を売っている【ヘファイストス・ファミリア】の店を見ている所を、たまたま発見されてしまった。

ミストはフィンのが苦手であった。常に笑顔の仮面を被り、最強派閥の団長として常に余裕のある姿を見せるフィンは、相手との会話から必要な情報を獲得し、精神的な弱みを見せないことで相手に付け込まれる隙を潰す。なにより会話による戦いが苦手なミストにとって、オラリオでの天敵と言っても差し支えない。

「ヘファイストスのテナントにいるということは、君は装備が目当てかい？」

「いや、私は装備を眺めるのが好きただけだ……買うつもりはないさ」

「冷やかしかい？」

「言い方は悪いが、そうだろうね」

一瞬の会話で、フィンはミストが【ヘファイストス・ファミリア】が作製する高価な武器を買えない訳ではなことを理解した。平然と数百万ヴァリスが必要になる武器が並ぶ店の中でも、ミストは特に緊張するわけでもなく武器を眺めている事実から、彼女のおおよその資金力を把握したフィンは、想像通り18階層にソロで潜る等閑ない戦闘能力を持っていることを把握した。

直剣を眺めてから横の槍へと視線を向けたミストは、フィンが変わらない笑顔のまま自分を見つめていることに気が付いて露骨に嫌そうな顔をしてから、ゆっくりとフィンの方へと顔を向けた。

「それで、なんの用か聞いていいのかな？」

「この間の話の続き、したいと思ってね」

「それは構わないが、あまり周囲に聞かれたくない話じゃないのかい？」

「勿論だとも」

第一級冒険者しか買うことのできない値段が並ぶ店の中とは言え、客足が少ない訳ではない。オラリオで有数の鍛冶師が揃う【ヘファイストス・ファミリア】としては当然の話だが、秘密裏の会話をするのにこれほど適していない場所もないだろう。

「そうだね……そちらが嫌でなければ、僕たちのホームで話を聞きたい」

「いいよ。別に警戒している訳じゃないから」

ミストの適当そうな言葉に込められた【ロキ・ファミリア】程度なら、後手に回ってもなんとでもなるという自信に気が付いているフィンは、普段から浮かべている笑みが崩れかけた。それは怒りや不快さから来ているものではなく、驚愕に満ちた感情からであった。

（彼女の力は、僕が想定するよりも遥かに……なら余計にここで喋る訳にはいかないな）

想定していた以上の力を隠し持っていることを察知したフィンは、ミストを先導するように歩き出した。先を歩くフィンの背中から、ミストに対する警戒心が滲み

出ていることに気が付いているのは、ミスとフィンの会話をずっと聞いていた小さな人形だけであった。

「自由に掛けてくれて大丈夫だよ。すぐにロキを呼んで来させるから」

「ロキ？ 君たちの主神かな？」

「ああ……僕たち【ロキ・ファミリア】の主神さ」

【ロキ・ファミリア】ホーム「黄昏の館」の会議室へと通されたミスは、フィンに腰掛けるように言われて椅子に座った。まさか本当にファミリアのホームまで案内されるとは思っていなかったミスは、フィンの見せた誠意だと思い込むことで無理やり納得した。

フィンはミスの正体を探る上で、質問以外には誠実に対応すべきだと判断し

ているのは事実だが、ホームへと招いたのは【ロキ・ファミリア】以外の誰もいないところで話を聞くためであり、ミストの口からオラリオを覆すような情報が出てきた場合に、ファミリアで揉み消すことができるようにとの措置であった。

自らの足でロキを呼びに行かず、ミストを監視するように見つめながらアマゾネスの少女に主神を呼びに行かせたフィンを見て、ミストの懐にいる参謀役はやりにくさを感じていた。

「おー待たせて悪かったな。うちが【ロキ・ファミリア】の主神ロキやー……ってなんや怪物モンスター祭ファイリアの時の姉ちゃんやん」

「ファイリアの？　ロキが言っていたトロールを一撃で倒したっていう」

「せや。Lv・3はあると思っとったけど……Lv・6はあったかあ……ほんま何者やねん」

少しして会議室へとやってきた主神ロキは、椅子に座って飲み物を飲んでいるミストを見て、糸目を少しだけ開いた。アイズ・ヴァレンシュタインと怪物祭の問題解決していた時に出会った謎の冒険者が、まさか今回の話にも絡んでくるとは思っていなかったロキは、様子見にほんの少しだけ神威を解放した。

下界に生きる者たちがどれだけステイタスを上げても逆らう気力すらも起きない、格の差を知らしめる神の威光は、自分に向けられていないはずのフィンですらも唾を飲み込むほどの力を見せていた。超越存在デウスデアの持つ圧倒的な格の差を正面からぶつけられたミストは、不愉快そうに眉を顰めた。

「……あっはははっ！　ほんまおもしろいなー下界は……まさか神威受けて平然としとるとは思わなかったわ」

「心臓に悪いからやめてくれロキ」

「すまんすまん」

招いた客人に向かっていきなり試すような真似をするロキにフィンは大きな溜息を吐いていたが、ロキが失礼なことをした甲斐はあった。どれだけ鍛えようが下界に生きる存在では神には逆らえない。ならば神の威光を真正面から受けて、反射的に殺気を向ける相手は果たして何者なのか。全ての真実を明らかにする必要があるのかもしれないと思い始めていたフィンは、ゆっくりとミストの方へと視線を向けた。

因みに、本気で神威をぶつけられても特に反応は変わりません  
悪意を持って神威をぶつけられていたら、運命の死でも解放してたかもしれませ  
んが

評価と感想頂けると嬉しいです



## 超越存在

「まず、前提として明らかにしておきたいことがある」

フィンの真面目な声を聞いてミストはそちらに目を向けた。超越存在デウスデアの神威を受けても全く動じない埒外の存在を前に、フィンは動揺を隠したまま真っ直ぐ視線をぶつける。「瞳と瞳で見つめ合う行為は、人の最も濃厚な接触であると言っていたのは狂い火に侵された誰かだったか」と、関係のないことを考えているミストは、聞かれたことにはしっかりと答えるぐらいはしようとしていた。

「君はオラリオに存在する何処のファミアにも属していない。これは本当の事かい？」

「所属した記憶はない。因みに、神は私の嘘が見抜けないからそんな質問形式にしても無意味だよ」

「……そうなのかい？」

「確かに言ってることが嘘かどうかは、わからん」

神が嘘を見抜けない存在がいることに驚きを見せたフィンは、ゆっくりとミスト

へと視線を向けた。神が嘘を見抜けない下界の存在などいるはずがない。フィンがファミリアに属していないなどという小さな話ではなくなっていることに気が付きながらも、ゆっくりと言葉を選んでいた。

「君はオラリオ外にいる神に神の恩恵を貰っているのかい？」

「いや、私は神の恩恵など貰っていないよ。そもそも、神から恩恵を得るというのがそもそも肌に合わないし」

「恩恵を、持っていない？」

「……もう下界の子供の枠超えてるなあ」

恩恵など与えられていないと平然と口にするミストにフィンは固まった。神が下界に降りてくる遙か昔『古代』と呼ばれる時代に生きていた英雄たちは、神の恩恵も無しにモンスターたちと戦ったと言われているが、ミストはそれと同じようなことをしている。神が降臨した『神時代』以降からは考えられないことではあるが、古代の英雄たちを少しでも知っているロキは、その未知数な力がそっくりであると感じていた。

「聞きたいことは聞けたかい？」



ンには一瞬の会話のどこに失策があったのか理解できなかつたが、ロキは確信を持っていた。

「下界の子供等が超越存在デウスデアの使う言語わかる訳ないやろ」

「ただのネットスラングをよくも言語なんて高尚な言葉に纏めたね」

「ねっとすらんぐ？」

ロキとミストの会話の中に含まれる単語の意味が理解できないフィンは、一人で眉を顰めていたが、それこそがミストの異常性であるとも理解していた。つまり、彼女は超越存在が扱う言語を理解できる、あるいは異世界では普通に使われている言語かもしれないという仮説を元にロキは喋っていた。

狭間の地にやってくる更に前、そこで生きてきた記憶を殆ど失っているミストだが、ネットスラングと言われる言葉遣いなどは独り言として呟いていた影響で頭に記憶されているのだ。あやふやな記憶であるため、どれが前世の言葉でどれが今世の言葉なのかも区別がついていないミストには、避けることができな<sup>イレキユラ</sup>い地雷である。

「ようわかったわ。自分は神じゃないんなら、外の世界から来た異常イレキユラ常言うことやな」

「そうなる、のかな。生憎、前にいた世界は自ら捨ててきたのでね」

「はー、自分で世界捨ててこれるとか、ほんまに俺 t u e e e e の無双ものやん」

「ふふ……私は伴侶に付いてきたらここにいただけだから、詳しくは知らないけどね」  
オラリオ

ロキはミストの伴侶という言葉を聞いて、すぐに怪物祭で隣にいた魔導士然とした姿の女性であることに思い至った。つまり、ミストは自らの意志で彼女についていたのであって、あくまで世界を渡ったのはミストの伴侶であるということになる。超越存在の語る言語を理解することができる存在がもう一人いるのかもしれないと思いつつも、ロキはミストの言う伴侶は何処にいるのかと視線で問いただしていた。

「ラニなら姿を見せることはないと思うよ。神が嫌いだし」

「神嫌い？ 珍しい、訳でもないな」

「オラリオでも何度か問題になったことがあるからね」

神が嫌いな存在はオラリオにもいるのかと思ったミストだが、知的生命体として生きている以上他人のことが気に入らなくなるのは当然のことかと納得した。

ミストの口から伴侶の名がラニであることを確認したロキは、フィンと視線を合わせた。今のところ、ミストは異世界からやってきた非常に高い戦闘能力を持つ一般人という認識だが、彼女がダンジョンに潜っていることを考えれば、なにかしらの目的意識はあるのだろうかと考え、アイコンタクトを行う。

「なら君はこの迷宮都市オラリオでなにを成したいんだい？」

危険な橋を渡りながら本質に迫る質問を投げかけるフィンに、ミストは不気味に笑みを浮かべていた。

ロキ、フィンとの対話は続きます

評価と感想頂けると嬉しいです

## 異常者

「何を成す、か」

質問に対して笑みを浮かべたミストの雰囲気が変わったことを、フィンとロキはすぐさま察知した。狡知の神としてあらゆる神を巻き込んできたロキは、目の前の相手が異常イレギュラーなだけの存在ではないことを察し、フィンは大人しかかった自らの親指が急に疼きだしたことで表情を固くした。

「私はもう成した後の存在だからね……あまりオラリオに興味はないんだ」

その言葉は、ロキの表情を強張らせるには充分な情報が詰まっていた。ロキから見たミストは、異常な強さを持つ異世界から来た謎の存在程度であり、神の好奇心を満たすことのできるかもしれない面白い相手程度だった。しかし、その異常な力を持つミストがオラリオに興味がないということは、誘われることがあれば闇派閥にだって付くだろうということでもある。

「でも一つだけ、興味がある」

「……へえ、なにか聞いてもいいんか？」

「いいとも。君たちもこの機会に観察してみるといいよ……英雄の素質というものを」

英雄の素質という言葉にフィンが反応しかけたところを、ロキが視線で制した。フィンがオラリオで冒険者をやっている理由を知っているロキは、ミストの言葉が持つ意味を理解した上でフィンは彼女の言葉に縋るであろうことを知っていた。だからこそロキはフィンを止める。今の彼は小人族バルクムのフィン・ディムナではなく【ロキ・ファミリア】の団長フィン・ディムナなのだから。

ミストはロキとフィンの間になにかしらの攻防があったことを察しながら、楽しそうな笑みを浮かべたまま英雄と呼ばれる存在を夢想する。

「彼の名前はベル・クラネル……ロキ、私は英雄と呼ばれる者がどんな者なのか、見てみたいんだ」

「そうかい。なら自分でなればええやろ」

「いいや。私はもうラニの王だからね……私では大衆の認める英雄にはなれないの」  
「ok」

ロキはミストの言葉に心底困惑していた。彼女程の力を持っている者ともなれ

ば、大衆の認める英雄とやらにもなることも簡単であるはずなのに、それは自分の役割ではないとあっさり投げ捨てる。にもかかわらず、英雄という存在が見たいがためだけにオラリオに居座っているという、まるで神のような知的好奇心。なににより、知的好奇心を満たす為ならば何をもうするであろう神とは違い、ミストは伴侶であるラニに危険が及べば、なんの躊躇いもなくそのベル・クラネルという英雄の素質を持つ者ごとオラリオを滅ぼすであろうという確信。ロキはここでようやくミストという存在の異常さを正しく認識することができた。

ロキに止められていたフィンフレイバーは、独り唇を噛む。大衆に認められる者が英雄であるというのならば、神から勇者の二つ名を授けられ、オラリオに住まう民から絶大な支持を得るフィンという存在は英雄と呼べるに相応しい。しかし、ミストの視界にはフィン・ディムナという存在はただの弁舌屋程度にしか映っていない。虐げられる同族を救うため、英雄を目指すフィンにとってこれほど屈辱的なことはない。「ほんなら、自分はその英雄を育てるためにオラリオにおるっちゅうことか?」「いや、ラニが離れると言えばそのまま離れるさ。英雄は見てみたいが、ラニには代えられない……時間は幾らでもあるからな」

まるで同族神と喋っているような感覚を味わいながらも、ロキは冷や汗が止まらなかった。異常な存在であるとは思っていたが、まさかここまで神に近い存在がいるとはロキも考えていなかったのだ。ロキの横でなにか言いたそうにしているフィンもまた、親指の疼きを気にして言葉が口から出てこない。ミストがエルデの王としての側面を少しでも見せた瞬間に、場を支配しているのはミストだった。

「しかし、君たちに協力を求められれば応えることも考えよう。メリット次第だが」「ほんならメリットがあれば、闇派閥にもつくんか？」

「勿論だとも。私はオラリオに興味がないからね」

あまりにも危険な存在である。決して心を許してはならず、適度な距離感を保たなければ、あっという間に自分たちが食い潰されてしまうほどの存在感。しかし、それは闇派閥側にとっても同じことであり、上手い関係を築ければ絶対なる切り札と成りえる。縫ってでもミストを味方につける必要性があるほどの事態が、この先起きないとも限らない。

ロキは自らの打算とも言える考えから頭を下げようとした瞬間、横にいたフィンがロキを止める。オラリオ最大派閥の主神が頭を下げるのは問題である。それでも

ミストに助力を願ひ、最低でも敵に成らないようにするためには頭を下げる必要があると、ロキは視線で必死に訴えるがフィンはやっくりと首を横に振った。

「……今、主神のロキが助力の為に頭を下げようとしていたが、君はそれを受け取ってくれるかい？」

「勿論、受け取らない……なんなら今すぐ斬って捨ててもいいな。そんなつまらない連中などいらぬだろう」

根本的に価値観の違うミストにとって、相対する者など利用できるか面白い者以外は全て敵である。ミストの雰囲気が変わってから疼いていた親指が、ロキが頭を下げようとした瞬間に、皮膚が裂けて血が噴き出るのではないかと思うほど強く疼くようになった。自らの危機を直感的に教えてくれる親指に感謝しながら、困ったような顔を浮かべていた。

(……選択を誤れば、即座に死にかねないな)

ロキと共に会話を重ねてきた中で、彼女の持つ異常な力の一端を把握したフィンは、疼く親指を一度舐めた。

---

フィンの親指設定は、多分ファイアナ騎士団団長であるフィン・マックールから来ているんですよ？

評価と感想頂けると嬉しいです

各話のミストちゃんの口調を修正しました

基本は温厚的で、戦闘時や悪いことしてる時は口調が荒くなるように統一しました

あと、カンストレベルは713だったので、あらすじを直しておきました

ガバを許して○

「まず、君が欲するメリットの中身を教えて欲しい」

「んー……私は装備品を集めるのが趣味でね。価値の高い装備であればあるほどいい……それか腕のいい鍛冶師を紹介してもらえると嬉しいな」

親指を舐めて頭を働かせるフィンは、ミストを味方に引き入れるために必要なのは誠意や下手に出ることではなく、打算による繋がりの方が的確であると考えた。事実、ミストはオラリオ最大派閥である【ロキ・ファミリア】の主神たるロキが頭

を下げようとも、微塵も価値を感じない。ミストは神時代ではなく古代に生きる者たちに近い価値観を持っているのだらうと推測した。

本来なら適当にあしらって、しつこいようなら全員殺してもいいかとも考えたミストだが、自らの武器を整備する者がいないことに思い至って話を続けていた。かつて狭間の地でミストの持つ武器を鍛えていたのは、円卓の鍛冶師であるヒューグだったが、当然この世界に彼はいない。鍛冶道具を渡されれば、自らの手である程度の整備はできるが、本格的な整備をするにはやはり本職の者でなければ信用できない。ミストにとって戦場で最も信頼できるのは己自身ではなく、手に持っている武器だけなのだ。

「いい鍛冶師か……そう言えば君は【ヘファイストス・ファミリア】のテナントを眺めていたね。お眼鏡に適いそうな鍛冶師はいそうなのかい？」

「ヘファイストスか……正直、心奪われる武器は幾つかあった」

「なんやファイタんの所か。そらオラリオ随一の鍛冶ファミリアやしな」

取り敢えず、ミストが【ヘファイストス・ファミリア】の鍛冶師に興味を持ってもらえたことに、フィン は安堵の息を吐いた。ヘファイストスでも足りないとなれ

ば、この世界には彼ら以上の鍛冶師が存在しない事実と共にメリット足りえなくなってしまう。

探索系最大派閥として、鍛冶ファミリアである【ヘファイストス・ファミリア】とそれなりに良好な関係を築いている【ロキ・ファミリア】としては、簡単な話ではあった。

「当然それ以外の要求もあるだろう。他にはなにかあるかい？」

「なにか？ 装備以外には何も無いが？」

「……ほんま神みたいない気分屋やなあ」

装備以外に特に言うことはない。そもそもミストとしても、色々な武器を振るうのが好きなだけであり、別段装備に拘って生きている訳ではない。ただ見たことのない形の武器があれば振りたくなり、振れば満足する。その程度の価値観しかないミストにとってみれば、装備に拘る冒険者の方が異常である。

まるで神のように好奇心の向く先がころころ変わるミストに、ロキは大きな溜息を吐いた。天界でも様々な神を見てきたロキとしても、異質と言えるその明らかなまでの達観的な思考は、彼女の秘密に関係しているものであると推測していた。

「ほんで自分は闇派閥イヅイルスの味方しないんか？」

「彼らが面白いことをするのならば味方するよ」

「うちらとこんな話していか？」

「邪魔になれば消せばいい。いつものことさ」

言葉と共に圧倒的な殺意を向けられたロキは、頬を引き攣らせていた。フィンも暴れるように疼く親指を抑えながら、ちらりとミストへと視線を向ける。彼女の目は嘘をついていない真っ直ぐなもの。つまり、彼女は本当に自分の利にならないと判断した瞬間に【ロキ・ファミリア】を滅ぼしてしまうだろう。

「……肝に銘じておくよ。君とは争わないと、ね」

「私は殺り合ってもよかったけどね」

「勘弁してくれ……相手にもならないだろう？」

「多分ね」

都市最強派閥と言われている【ロキ・ファミリア】であろうとも相手にならない。傲慢なように聞こえる言葉だが、そこには自分の実力を等身大に評価している戦士としての自信があった。そして、なによりフィンは親指の疼く感覚から彼女がまだ

特大の秘密を隠していることを察して、乾いた笑みが自然と出ていた。

「……ほんまに、自分は何者なんや？」

「私は私だよ。神ロキ」

ゆっくりと立ち上がったミストは、ロキを見下ろすようにして微笑んだ。

「……得体の知れない存在だとは思っていたが、これ程までとは思わなかったよ」  
「せやなー……」

【ロキ・ファミリア】のホームである『黄昏の館』から去っていくミストを見送りながら、フィンは大きな溜息を吐いた。初めて会った時から強いとは思っていた。しかし、そんな認識では甘い存在であることを今回の会話でようやく理解することができた。そして、その力が彼女の気分次第ではオラリオに向かって放たれる可能

性すらも。

「普段は温厚であんまり騒がん。けど売られた喧嘩は絶対に買う。執念深くて一度敵と見た相手は絶対に逃がさないって感じやな」

簡潔にまとめたミストの特徴を聞いて、フィンはずいぶん溜息を吐いた。

「鍛冶師を紹介するだけで味方になってくれる……訳はないよね」

「ん……そのベル・クラネル言う奴に手を出さなきゃ問題なさそうに見えるけどな」

強大な力を持つミストが気にかける英雄の素質。彼女の言葉を信じるのならば、ベル・クラネルという人物は【ロキ・ファミリア】に所属しているどの冒険者よりも優れた素質を持っているらしい。

「この先あんな奴が闇派閥に与しようもんなら……オラリオは終わりや」

彼女が持つ秘密を全て暴き出せた訳ではない。今回のことでわかったことなど、彼女が異世界からやってきた存在であり、ベル・クラネルという人物に一定の執着心を持ち、現在オラリオにおいて最も強く最もあやふやな存在であるということだけである。

「今回のことではっきりしたんは、あれの伴侶とやらには手を出さなっただけやな」

「……姿を見たのはロキとアイズだけなんだろう？」

「まあな……けどなんも知らんで？」

「知らない方が好都合だろうね。誰かが利用しようものなら、オラリオごと滅ぼしかねない」

誇張表現ではなく、ミストルティンは本気でそうするだろう。そう思わせるだけの雰囲気は彼女にはあった。

結局、ロキとフィンにはミストに対してこれからどう接していくのかを答えを得ることもできないまま、ミストを見送ることしかできなかった。

---

あせんちゅは鍛冶師紹介してもらえるので、しばらくはロキ側につきます

ただし、闇派閥にも協力する約束をしているので、内容次第では闇派閥側にもつ

きます

自分にメリットがある方へ、あせんちゅは味方します

皆がタリスマン「ミリセントの義手」の為だけにミリセントを最後に裏切るのと  
同じです（？）

評価と感想頂けると嬉しいです

## 遭遇

「ふーむ……それでダンジョンに潜りたい、と？」

「そうだよ」

ミストが【ロキ・ファミリア】のホームで喋っていた翌日、いつも通り街中でも散策していかうかと外に出たミストの前に現れたのは、先日命を助けたばかりのスコット・スキアーであった。冒険者通りの裏路地で座り込みながらミストに事情を説明したスコットは、頼み込むようにしてミストへと頭を下げた。

「火炎石なんて深層の素材だろ？ 俺じゃあ到底無理だ」

「それは知ってるよ。あのもの好き商人め」

スコットがミストに対して頭を下げている理由は、闇商人であるネブラが深層のモンスターからドロップする火炎石というアイテムを欲していたからである。彼が深層のドロップアイテムを欲しがっている理由など、先日の暗殺者騒ぎの時にミストが投げた火炎石の威力を見て、仕入れたくなかった程度の考えである。わざわざ直接ミストに頼まずスコットに頼んだ理由は、本人に頼めばまず間違いなく断られる

であろうことを知っていたからである。

ミストはスコット・スキアーという人物のことを面白い奴だと思っている。Lv・3というオラリオ全体で見ても選ばれた者にしか至ることができない位階にまで到達しながら、常に背後を気にして生きている。闇派閥イッツイルスに所属しているという事実がそうさせるのか、あるいは生まれついでに性なのかはミストにも理解できない。その臆病さを、ミストは買っているのだ。それこそ、最終的にはけしかけてベル・クラネルにぶつけようかとも考えるほどに。

「その……もし嫌そうな顔をしたら「後で頼みなら聞いてくれると言っていましたよね」と言えって」

「正直、口約束程度だったら相手を殺せば無効にできるけど、今あれを殺すのは損かな」

「ひっ」

懇意にしているはずの商人に対しても、なんの気負いもなく刃を向けることができるミストの精神性を垣間見て、スコットは自分もいつかそうなるのではないかと顔を青くしていた。

スコットは、ミストという存在の危険さを誰よりも知っていた。それこそ、面と向かって彼女と会話していたフィン・ディムナよりも。臆病者としての精神が、ミストという異常者には決して近寄ってはいけないのだと叫び続けていた。

「……まあいいか。火炎石程度なら確か40階層程度だったはずだし」

「40……俺、生き残れるかな……」

自分が今から向かう階層は地獄であると察したスコットは、遺書の1つでも書いて来ればよかったと後悔しながらミストの後ろをついて歩き始めた。

オラリオの地下、数多の冒険者たちが様々な物を夢見るダンジョン。その比較的上層に含まれる9階層は現在、異様な雰囲気に含まれていた。逃げ惑う冒険者たちは、9階層に現れたモンスター相手に逃げているのではなく、下から人為的に

運ばれてきたモンスターから逃げているのだ。

「お、置いていくなよお！」

「だったらもっと早く走れ！ 死んじまうぞ!？」

「……騒がしいな」

「なにかあったのか？」

火炎石確保のために40階層付近まで潜る必要ができたミストは、スコットを同行者としているため祝福に向かって転移することもできずに1階層から順番に踏破していた。素材を回収するだけならスコットを置いて行けばよかったのだが、彼の実力を自分の目で確認したいと考えたミストによって強制的に連行されている。

順調に道中のモンスターをスコットに屠らせていたミストは、9階層に踏み込んだ時点で騒がしさを感じていた。ミストよりもダンジョンに詳しいスコット・スキアーは、自分の知っている9階層とは全く違う雰囲気警戒心を露わにしていた。

「そのの。何があった」

「と、止めるなよ!？」

「さっさと話せ」

横を通り過ぎようとする冒険者の1人を捕まえたミストは、現在9階層で起きているのであろう異常事態についての情報を求めた。血相を変えて逃げていた男からすればたまったものではないが、声を荒げた瞬間に腰に持っていた刀へと手が伸びたミストを見て、必死に説明する趣旨を叫び始めた。

「な、何故か9階層にミノタウロスがいるんだよ！ 大剣を持ってて……返り血もついてた！ これでいいだろっ!？」

ミストに促されて情報を早口に喋った男を解放したミストは、自分の後ろを歩いているスコットへと視線を向けた。

「ミノタウロスは中層のモンスターで、上層の9階層にいるのは完全に異常事態だよ。大剣を持っていたとも言ってたが、もしかしたら殺した冒険者から奪ったのかもしれないねえな」

「そうか……武器持ちか」

スコットの大まかな説明を聞いて状況をある程度把握したミストは、ミノタウロスを無視して下の階層に向かうことを考えていた。牛程度が武器を持ったところでミストにとってはなんの脅威にもならず、別段面白いものでもない。武器を持って

曲芸をやる牛を見たところで時間の無駄でしかないのだ。

ダンジョンの異常事態というものに極度の恐れを見せるスコットを無視して、ミストはずんずんと先に進んでいく。時折遠くから聞こえてくる牛の遠吠えにも反応せずにミストは歩いていたが、ミノタウロスの破壊音が近くなった瞬間にミストは足を止めた。

「ど、どうした？」

「……見てみる」

ミストが指差した方へとスコットが視線を向けると、そこには大剣を持ったミノタウロスと戦っている少年の姿があった。白髪を揺らしながら必死に戦う姿を見て、スコットは息を呑んだ。

「Lv・1の冒険者か？ ミノタウロス相手なんて簡単に死んじまうぞ」

「女神の仕込みは済んでいたか……」

「なに言って、ておい!？」

白髪の少年がミノタウロスと戦っている姿を見て、兜の中で笑みを浮かべたミストは、そのままダンジョンを引き返した。少年を助ける訳でも、ダンジョンの奥へ

と進む訳でもない行動を見せるミストに困惑しながら、スコットはミストの背中を追う。

闇派閥に属しているとはいえ、スコットは常識的な考え方をしている。Lv・1の冒険者がミノタウロスに襲われていれば助けに入ろうとするのが普通だが、ミストはそんなことは関係ないと9階層を歩く。ゆっくりと歩きながら坩堝の騎士装備から装いが変わっていく姿に戦慄しながら、スコットは口を挟むことができなかった。

「やはり、いたな」

「む」

「お、【おうじや猛者】!？」

全身を黒い装備へと変化させたミストが辿り着いた先には、オラリオ最強の冒険者であった。

次の話で書くと思いますが、ミストちゃんちゃんの装備は坩堝の騎士からマリケス装備

に変わっています

重量の問題もありますが、抗死耐性以外増埒の方が優秀です（○  
評価と感想頂けると嬉しいです

## 猛者

ダンジョン9階層にてオラリオ最強の冒険者であるオツタルと相対したミスとは、静かにその顔を見つめていた。一方、オツタルは目の前の人物など全く知ることはない。都市最強と呼ばれるオツタルにとって、顔に見覚えのない冒険者は全て有象無象でしかない。

「な、なんで【猛者】おうじやオツタルがここに!？」

背後で騒ぐスコットを全て無視したまま、ミストは冷静にオツタルを見つめていた。鍛え上げられたその肉体や、無骨だが確かに整えられた大剣。そして明らかに格下と決めつけている瞳をしながら、一切の油断も見受けられないその佇まい。ミストはかつてラニに対し、女神至上主義である猛者は腑抜けた冒険者であると発言したが、ミストの前に立つ武人には一切の無駄が存在しなかった。

「まずは謝っておこう。【猛者】オツタル……私はお前のことを侮っていた」

「……お前の顔に見覚えはないが、侮られていたことに対する謝罪は受け取ろう」  
オツタルの女神至上主義は己と同じものであると、ミストは認めたのだ。ミスト

がラニを崇拜し、愛しているように、オツタルもまた己の主神であるフレイヤのことを崇拜し、愛しているのだろう。そこに想いの大きさは関係ない。ミストは、オツタルの持つ感情が己と同種であると確認した。故に、ミストは武器を抜いた。「お前の本当の実力、ここで知っておくのも悪くはない」

腰に差すにはあまりにも長い刀をゆっくりと抜いたミストは、好戦的な笑みを浮かべた。口元だけが露出する漆黒の鎧であるマリケスの鎧は、坩堝の騎士が身に纏う鎧よりも防御性能が高い訳ではない。しかし、独特の意匠から放たれる圧倒的な殺気と圧力は、オツタルに警戒心を抱かせるには充分だった。

抜き放たれた刀は、明らかに持ち手に対して刀身が長すぎる。如何なる達人が持とうともまともに振ることすらできないであろうはずの長刀を、ミストはなんの違和感もなく構える。『長牙』と呼ばれるその刀は、かつて狭間の地において「血の指の狩人ユラ」が用いた刀である。鍛え上げられたその刀は槍の如く、突き攻撃において真価を発揮する武器であるが、ミストは突きの構えを見せずに両手で柄を握る。

「……挑まれるのならば、応えよう」

オツタルがLv・7に到達してから既に7年の月日が経過している。幾度となく同業である冒険者たちとも刃を交えてきたオツタルだが、その戦いにおいては一つの黒星も存在しない。故にオツタルはオラリオ最強と呼ばれるに至っているが、実のところ彼はその呼び名を忌み嫌っている。己の身体に、脳裏に刻み込まれた幾度もの敗北が、最強という二文字を嫌っているのだ。

オツタルは他が認める最強でありながら、今でも多くの冒険者に挑みかかられる。多くが一合でもって決着のつく勝負ばかりだが、オツタルはその挑戦を断りたくない。

「っ!？」

「力は、流石の一言だな」

想定以上の速さで振り下ろされた長牙を咄嗟に防いだオツタルは、力で押し込まれる感覚を味わいながら驚愕に目を見開いた。自分がモンスター以外の存在に力ですりでも押されたのはいつ以来か、オツタルに過去を回想する暇すらも与えずにミストは続けざまに刀を振るう。既に、オツタルの中に残されていた都市最強として迎え撃つ気持ちは消えていた。

視線を真っ直ぐ向けたまま放つ連撃に対して、オツタルはLv・7へと至った動体力を駆使して攻撃全てを防ぐ。同時に、オツタルは戦いを始める前に言われた実力を知っておくという意味を理解する。オツタルが過去全ての戦いによって得た経験や、女神に与えられた恩恵を最大限に駆使してやっと捌いている剣戟は、オツタルがギリギリ防げる範囲を探っているのだ。その証拠に、ミストの剣戟はどんどんと加速していき、ついにオツタルの頬に薄い切り傷を与えた。

「想定以上だな。神の恩恵ツアルナに頼り切らないその武術、流石と褒めておこう」

「こちらでも謝罪しよう。一目見た時からお前を侮っていたことを」  
「ならば全力を見せてみる。お前の女神に対する気持ちを、な！」

ミストは既にオツタルのことをただ1人の神に仕える者として、自らと同等であると認めている。オツタルとて良識はあり、たとえ悪人が相手であろうとも、人を斬ることに眉を顰める気持ちにはなるだろう。だが、その相手が自らの信じる神を害そうとするものならば、彼は迷いなく敵対者として相手を斬ることができる。それはミストも同じである。自らと同じ立場だと認めているからこそ、彼の力が見たくって仕方がないのだ。

スコットは目の前で繰り広げられている高度な戦闘を、目で追うことすらもできない。同じ腕が2本の生物が戦っているとは思えない攻防の前に、スコットは言葉すらもでないまま立ち尽くしていた。

「そこが、限界か？」

「ぐうっ!？」

「どうやら、そうらしいな」

超高度の剣戟は一瞬の間で決着がついた。さっきまで大量に重なり合っていた大剣と刀が重なり合わず、滑り込むようにオツタルの腹部に峰が叩き込まれた。オツタルが反撃で繰り出した大剣を最小の動きで避け、隙と呼ぶにはあまりにも小さい隙に対してミストが刀を挟み込んだだけである。

衝撃を受けて片膝をついたオツタルを、ミストは満足げな目で見下ろしていた。そして、攻撃を受けたオツタルは短い攻防の中で、相手が自分よりも遥かに格上であることを察していた。それが神から与えられた恩恵によるステイタスの差ではなく、純粋な剣士としての技量だけで敗北したことも。言い訳の1つもできない敗北の前に、オツタルは薄く笑みを浮かべた。

「ありがたい。俺はまだ、上を目指せる」

「私を目標とするか。それもいいだろう」

ミストの中で既に結論はついていた。オツタルが自らと同じである以上、彼は大衆の英雄となることは不可能である。だが、それでも立ち上がるうとするオツタルに対して、ミストは笑みを浮かべる。

「ならば1つの高みを見せてやる。全力でかかってこい」

長牙を鞘に納めたミストは左手に盾を持ち、片膝をついたまま見上げるオツタルを挑発していた。

---

オラリオで自分の同族を見つけてうきうきしているミストちゃん  
評価と感想頂けると嬉しいです

## 高み

遠くからミノタウロスの遠吠えが聴こえてくる9階層で、都市最強である猛者オツタルもまた叫び、そして無様に床を転がっていた。

「オオオツ！」

「甘い」

都市唯一であるLv・7の力と敏捷のステイタスから放たれる神速の横薙ぎを、ミストは軽々と見切って紙一重で避ける。避けられることを想定していたオツタルは、繋げるようにして身体を回転させて大剣を振るい、ミストを頭から真っ二つにしようとするが。

「直線的過ぎるな」

ミストが左手に持つ盾によって軽々と弾かれ体勢を崩したオツタルは、そのままの勢いで後ろに倒れ込み、ダンジョンの床に座り込む。続けざまにミストの蹴りが繰り出され、オツタルは恥も外聞もなくそのまま床を転がって避ける。

既に幾度となく繰り返されてきた動きに、オツタルは内心の疑問を押し留めたま

ま立ち向かう。

ミストが見せている盾による弾きは、狭間の地においてパリィと呼ばれる戦技である。敵の攻撃を的確に見切り、その力を逸らすことで相手の体勢を崩させる。それは使用者の筋力ではなく、圧倒的なまでの戦闘経験と巧みな技術から繰り出される基本にして必殺の戦技である。本来ならば、体勢を崩した無防備な相手に対して致命の一撃を叩き込むことこそパリィの基本ではあるが、ミストはオツタルに対して高みを見せる方法として使用し続けていた。

「己の神を守りたいのだろうか？　ならば戦い方に手段を選ばな。勝ち方に綺麗も汚いも存在しない……そこにあるのは己が勝ったという事実だけだ」

「オオオオオオオオッ！」

嵐のように、という例えすらも生温いオツタルの連撃を前に、ミストは冷徹な表情のまま全てを捌く。横薙ぎを避け、切り上げを見送り、縦切りを弾く。連撃を途中で無理やり中断させられたオツタルは勢いのまま背中まで地面に倒れ込み、ミストの追撃として繰り出された蹴りを脇腹に受けて壁際まで転がり、壁を背にしたままゆっくと立ち上がった。

オツタルの中に、既に猛者としてのプライドなど存在しない。ただ格上の相手がまだまだ未熟な自分に対して手荒な特訓を付けてくれている程度の認識しか、今のオツタルには存在しない。だからこそ、オツタルは自らの魔法を使うこともなくただミストへと立ち向かっていく。

「力だけか？」

「ぐうッ!? まだ、だッ！」

全力を以って大剣を振り下ろせば、ミストの持つ小さな鉄の盾程度など容易く切断できるだけの力を、オツタルは持っている。ミストと同じ大剣で同じように打ち合えば、必ず押し勝てるだけの臂力をオツタルは持っている。耐久力も敏捷性も、オツタルの方が上を行っている。にもかかわらず、オツタルはミストに対して手も足も出ていない。

(これが)

拮抗するように打ち合う大剣と盾の音に対して、結果は誰が見ても圧倒的なものである。オツタルが最強であると信じていたスコットですら、目の前の光景に対して言葉も出ない。武器の性能などでは済まされない、圧倒的なまでの戦闘能力の

差。それを痛感しているはずのオツタルは、普段の仏頂面を崩して獰猛な笑みを浮かべていた。

(これが高みか！)

ダンジョンの床に罅が入る程踏み込んで振るわれた本気の一撃は、他の攻撃と何も変わらずにただ弾かれる。ただ圧倒されただけの戦いに、オツタルは満足そうな顔をしながら迫る拳を頬に受けてダンジョンの壁に激突して、意識を失った。

「武人……か。私にはできない生き方だ」

ダンジョンの壁に激突したまま動かなくなったオツタルに視線を向けながら、ミストは自らの拳を見つめた。Lv・7冒険者の耐久を持つオツタルを殴り飛ばした右手が少し痺れているのを感じながら、通路の奥から走ってくる冒険者たちに目を向

けた。

「これは」

「げっ!? 【ロキ・ファミリア】 かよ!?!」

「ほう…… 【劍姫】 か」

腕に小人族の女性を抱きしめたままやってきたアイズ・ヴァレンシュタインを見て、ミストはミノタウロスと戦っている少年を思い出した。女神フレイヤの差し金によって白髪の少年——ベル・クラネルに危険が及んでいることを知っているミストは、アイズがベルを救うために走ってきたことを理解していた。

オツタルが9階層にいることは、ベルに与えた試練を見届ける為であると思っていたミストだが、彼はすぐにやってくる上級冒険者の助けを防ぐためにいたのか、と考えたミストは少し迷ってから長牙を抜いた。

「なにをっ!?!」

「くだらん問答はいらん。猛者のしたかったことは私の方でさせてもらおう」

オツタルがしようとしていたことが、ベル・クラネルとミノタウロスの戦いに水を差されないことなのだとしたら、それはミストとしても願ったりである。今すぐ

にアイズがベルの元に辿り着けば、彼はきつと流されてしまうだろう。希望もない戦いの中で立ち上がり続けるほど、今のベルは強くはない。

ベル・クラネル救援へと向かっていたアイズの行く手を阻む黒い鎧の敵は、見たこともない長刀を振るいながら、アイズを後ろへと追いやっていく。片手に瀕死のリリルカ・アーデを抱えながら戦えるような相手ではなく、アイズは唇を噛みながら大きく後ろに後退した。

「テンベスト目覚めよ」

リリルカを地面にゆっくりと下ろしたアイズは、愛剣デスペレートトリガーを構えて詠唱を引く。アイズ・ヴァレンシュタインの持つ唯一絶対なる魔法の発動は、開戦の合図に他ならない。長牙を構えるミストは、1人ダンジョンで微笑んだ。

ミストちゃんのお気に入りがベル君からオツタルへと移行しつつありますが、そのうちベル君に戻ってきます

評価と感想頂けると嬉しいです



## 神殺しの矢

荒れ狂う暴風を纏いながら突進するアイズを、ミストは軽々とあしらっていた。Lv・6に到達して短い期間とはいえ、既にアイズは過去に敗北した赤髪の調教師レヴィスをも打ち破る力を入れた。それでも、アイズは目の前の黒い鎧の人物に對して全く有効な攻撃を放てずにいた。

「っ！ 退いて！」

「断る。あれには試練が必要なのだ」

「試練？」

剣が交差する最中に交わされた言葉に、アイズは眉を顰める。目の前の相手が言う「あれ」とは、ベル・クラネルを指していることであろうことはわかった。しかし、試練が必要であるという言葉はあまりに傲慢に聞こえる。そんなものの為に彼が巻き込まれているという事実には、アイズの心は平穩からほど遠くなっていく。

アイズの剣を受けるミストは、彼女のレベルが上がったことを、ぶつけ合う剣を通じて理解していた。明らかにレヴィスと戦っていた時とは動きの質が違い、付加魔法エンチャント

を含めればオツタルを超える速度が出ていると言われても納得できる。ただ、納得できるだけである。

「直線的だな。そんなにあれが大事か？」

「っ！」

ミストの挑発するような言葉に、アイズは声なき叫びで応えた。デスペレートに纏われていた風が更に強くなり、暴風を纏ったままミストの命をも狙って剣を振るう。が、それをいつの間にか左手に持っていた盾で弾かれる。

「えっ？」

「遅い」

理解する間もなく思考の空白を突かれたアイズは、腹部に衝撃が伝わりと同時に通路まで吹き飛んでいった。都市最強格の冒険者を続けざまに2人も圧倒した事実に、背後で戦いを見守っていたスコットは顔を真っ青にしていた。闇派閥がどんな存在を味方につけようとしていたのか、その実力を唯一知ってしまったスコットはもう逃れられない。

アイズが吹き飛んでいったのを見送ってから、ミストはゆっくりと長牙を鞘へと

納めてスコットへと視線を向ける。急に振り返られたスコットは明らかに動揺したような反応を示していたが、ミストは全く気にすることなく10階層へと下る階段へと向かって歩き始めた。

「ま、て」

「もう立ち上がるか。流石の耐久力だな、猛者オツタル」

大剣を杖代わりにしながら立ち上がるオツタルは、しっかりとミストを視界に入れたまま消えぬ闘志を燃やしていた。しかし、彼が今から再びミストに立ち向かうことはない。今から立ち向かった所で、結果は見えているのだから。それでもオツタルが立ち上がったのは、聞かなければならないことがあったからだ。

オツタルが立ち上がった少し後に、通路からはアイズと複数人の冒険者が慌てて小部屋に飛び込んできた。遠征の為に18階層を目指していた【ロキ・ファミリア】の主力冒険者たちである。アイズを筆頭に複数人の幹部が揃って黒い鎧の相手を見つけてから、ボロボロのオツタルを見て全員が目を見開く。

【フレイヤ・ファミリア】の猛者オツタルとしてではなく、1人の武人として名前を、聞きたい」

オツタルは自らの完全敗北に対してなど既に興味が無い。繰り広げた戦いは最早戦いではなく、相手にとつては兎戯に等しい手解きにすぎない。それを知っているからこそ、猛者という名前を捨ててオツタルは目指すべき高みの名前を求めた。

「我が名はミストルティン……神殺しの矢、その名を与えられた者だ。精強なる武人オツタル、これからの貴公に期待しているぞ」

「ミストル、ティン」

自らの目指すべき高みの名を噛みしめたオツタルは、ゆっくりと立ち上がって

【ロキ・ファミア】の横を抜けた。

「オツタル。君は負けたのかい？」

「……勝負にすらならなかった。お前も挑むのならば覚悟しておけ勇者」  
プレイヤー

オツタルの言葉に驚きの表情を浮かべるフィンは、ミストルティンに視線を向けた。つい昨日、自らのホームである黄昏の館で会話した相手が、まさかオラリオ最強の冒険者を蹂躪しているとは思っていなかったフィンは、遠征開始前から疼いていた親指の正体が彼女であることを察した。

「ここで何をしているのか、聞いてもいいのかい？」

「私は色ボケ女神の娯楽を利用しただけにすぎない。聞いたところで大した返答はできないぞ」

普段の落ち着いた口調からは一転した威圧感のある口調で喋るミストに対して、少しでも余計なことをすれば即戦闘に発展することを理解していた。ちらりとベート・ローガの方へと視線を向けたフィンは、今すぐに飛び掛かりそうな雰囲気を出しているベート、ティオナ、ティオネに溜息を吐きたくなった。

そもそも遠征中である【ロキ・ファミリア】が何故上層である9階層で、ミノタウロスの一頭を探しているかと言えば、単純に負傷している冒険者たちから事情を聞いた瞬間に、既に走り出していたアイズのせいである。そのアイズは、蹴りを受けた腹部を片手で抑えながら今にもミストへと突進しそうな姿勢でデスペレートを構えていた。

「……そろそろ頃合いだろう。別に通ろうと私は止めんど」

「っ！」

「ちょ、ちょっとアイズ！」

腰に差してある長牙から手を放したミストを見て、アイズは瞬間に飛び出してミ

ストの横を抜けていった。それを追いかけるようにアマゾネスの姉妹であるティオナとティオネが続き、狼<sup>ウエアウルフ</sup>人のベートが後から続いて走り抜けた。

「……リヴェリア、その子の治療を頼む」

「ああ」

団長からの指示に従って、血塗れで倒れる小人族<sup>バルウム</sup>の少女の傷を癒すりヴェリアを横目に、フィンはミストへ視線を向けた。マリケスの兜を取り、素顔を晒したミストは不敵な笑みを浮かべていた。

ミストちゃんのパリイはバックラーパリイです

評価と感想頂けると嬉しいです

## 冒険者

オツタルを圧倒しアイズを完封した相手を前に、フィンほどのように話を切り出せばいいのか途轍もなく迷っていた。頭の中で幾つもの言葉が巡り、その言葉に相手がどう応じるのかを瞬時に計算する。望むものでなければその選択肢を捨て、別の言葉ならどうかと自らの持つミストルテインという人物の情報と照らし合わせて最善の道を探す。

「君は、ベル・クラネルという少年が英雄になるのを見たいと、言っていたね」

かろうじてフィンが絞り出した言葉は、前回交わした言葉の反芻である。何も口にしないまま時間を無駄にするのは良くないことだと、親指がする主張に則って間を稼いだのだ。

一方、相対するミストはフィンと口で戦って勝てるなどはなから考えていないため、答えられない言葉が来れば武器で応え、無言が続くのならば武器で語ろうとしていた。フィンの親指は正しかったと言える。

「今、この先でミノタウロスと戦っているのがその、ベル・クラネルなのかい？」

「そうだ。どこぞの色ポケ女神が入っている奴でもある」

彼女の言う色ポケ女神と言うのは状況証拠からいってオラリオ最大派閥の片側である、女神フレイヤであることは間違いない。となれば、中層からしかないモンスターであるミノタウロスが上層にいる理由は、ベルに対してフレイヤがミノタウロスをぶつけたかったからであろう。フィンには推理を終えてから、ミストへと視線を向けた。

「何故、オツタルと戦っていたんだい？」

「最初はただオラリオ最強を肌で感じたかっただけだったんだが、どうしても確かめたくなかったことがあってな。後、興が乗った」

「気紛れでオラリオ最強を相手にする冒険者、か」

傍でフィンとミストの会話を聞いていたリヴェリアは、戦慄と共にミストの顔を確かめていた。フィンとアイズから報告で何度か名前の上がっていた人物ではあるが、まさかこれ程まで規格外の相手であるとは露ほども思っていなかった。

「そちらは遠征だと聞いたが？」

「9階層に留まっているのは僕らだけだよ。ミノタウロスの件でアイズが先走っ

てしまったからね」

そういうものかと適当に納得したミストは、後ろでずっと固まっているスコットを手招きした。【ロキ・ファミリア】と関わり合いになりたくないスコットはごく嫌そうな顔をしていたが、ミストが一睨みすると凄まじい速度で近くへとやってきた。

「彼は？」

「ん？ ああ……：そういえばスコットのファミリアなど聞いていなかったな。まあいいか、ファミリアに興味などないしな」

「ひ、酷くないっすか？」

「ファミリアには、興味が無い。お前個人のごことはそれなりに気に入っているぞ？理由がなければ処分しない程度にはな」

オツタルとアイズを圧倒したミストに対して自然と下手くそな敬語が出てくるスコットだが、ミストは特に気にすることもなく、フィンに聞かれたことも答えるつもりもなかった。

「そ、それで……：なんで俺を呼んだんすか？」

「お前、上手いこと切り抜ける方法を考えろ」

「無理っすよ。なんでできると思ったんすか？」

ミストとスコットは、フィンと口で戦って勝てるとは最初から考えていない。ミストはオツタルと戦って満足している後だけに、面倒なフィンとの舌戦にもならない会話などしたくない。スコットは自分が闇派閥に属しているという後ろめたさから、フィンと真正面から会話できる気がしない。

心底面倒だと思ったミストは、長牙に手をかけることで無理やりスコットに会話をさせるように仕向けた。普通ならありえない話だが、この女は斬るといったら絶対に斬るといふ危なさが存在する。スコットは顔を青褪めて頷いた。蛮族的交渉術の勝利である。

「あ、あ……俺はスコット・スキアー。所属ファミリアは冒険者の秘密ってことで」

「構わないよ。今は彼女との関係性を聞きたいからね」

スコットはフィンに闇派閥であることを隠しながら喋らなければと考えているが、フィンは親指が疼くままミストとの関係性を聞いた。ミストが親しくしている

人物がいることに、フィンは危機感を覚えているのだ。味方に引き入れないとまずいという考えはあるが、それ以上にフィンはスコットのことを知らないというのが危機感を募らせていた。

「関係性……手駒？」

「あつてるな」

「あつているのか」

「あつてるんだね」

自分とミストの関係性を考えたスコットは、手駒という表現を使った。それに対してフィンとリヴェリアが同時にミストの顔を見ると、得心したという顔で頷き、フィンとリヴェリアは呆れたような顔でスコットを見つめた。

「……ん」

「目が覚めたか？」

スコットが自分で言った言葉に落ち込んでいる間に、リヴェリアに治療されたりリルカが目を覚ました。自分が助けを求めた【ロキ・ファミリア】が治療してくれたということに気が付いたりリルカは、すぐに起き上がろうとして身体のバラ

ンスを崩して倒れ込んだ。

「無理をするな。傷は塞がったが血は戻らないんだぞ」

「り、リリはいいんです……ベル様を」

「ベル・クラネルならどうせ勝つ。問題ないだろう」

「っ!? ベル様は、まだLv・1なんですよ!? どうやってミノタウロスに勝つと

——」

「騒ぐなやかましい。あの程度越えられないのならばその程度の器だというだけだ」

ミストのことを【ロキ・ファミリア】の一員だと思っているリリルカは、投げやりな言葉に怒りを露わにした。やはり冒険者など碌な奴がいないのだと、生まれた世界を呪ったリリルカ・アーデの言葉をミストは鼻で笑った。

「安全マジンを守って、ちまちまとダンジョンに潜る。命程度も天秤にかけられない奴が冒険者を名乗るな」

「ッ！」

リリルカ・アーデは、静かに立ち上がった。

ミストちゃんは死んでも生き返る癖に命程度とか、なに言ってんだこいつ（書いた本人）

評価と感想頂けると嬉しいです



## 英雄街道

「ベル様は……他の冒険者とは違う！　ベル様は、恐怖に吞まねながらも必死に戦っているんですよ！」

「……そうか。なら見に行こうか。お前の言うベル様とやらを」

リルルカ・アーデの叫びを無視して踵を返したミストは、ダンジョンの奥から聞こえてくるミノタウロスの声へと耳を傾けた。

「近いな。トレント」

「う、馬!？」

「これは……」

ミストが指笛を鳴らすと同時に、霊馬トレントが何処からともなく現れた。馬が虚空から現れるという現象に、ミスト以外の全員が驚愕する中、いつも通り早く乗れと鼻を鳴らすトレントに跨ったミストは、フィンとリヴェリアにちらりと目を向けてからトレントを走らせた。

「ダンジョンの中でどうやって馬に乗っているのかと思ったけど、まさか虚空から

とはね」

「精霊の一種なのか？　だが、今の世界に精霊など……」

虚空から出現する馬など精霊以外にはありえないが『神代』に入ってから、精霊というものを見た者は殆どいない。あったとしても、意識すら持たない力の薄い精霊のみである。それが実体として存在し、跨れる精霊など『古代』にまで遡らないと出てくることはないだろう。

「と、とにかく追いかけ、ないと……」

「無理をするなど言っただろう。フラフラではないか」

「でも、ベル様が……」

「わかってるさ。先にアイズたちが向かっている……もう助かっている頃だと思うよ」

フィンの安心させるような言葉に懐疑的な目を向けるリルルカと、先に行ってしまったミストを追いかけられるために走り出したスコットは、同じ事を考えていた。どうでもいいから早く行きたい、と。

「ん……思ったよりやるようになったね」

「っ！ あなたは……馬？」

助けの手を伸ばしながら、その手を振りほどいて戦い始めたベル・クラネルとミノタウロスの戦いを見ていたアイズたちは、聞こえてきたミストの声に敵意マシマシで振り向いたが、赤い果実を食べている馬の顔を見て毒気を抜かれていた。

トレントにロアの実を食べさせながらベルとミノタウロスの戦いを眺めるミストは、思ったよりも苦戦していないことに驚いていた。ベル・クラネルはミストの想像以上の速度で強くなっている。それが憧憬アイズに対する想いで強くなっているなど、ミストの思考には掠りもしない理由であることは誰も知らない。

「どうやってやがんだ……なんであの兎野郎は」

「すごい……」

都市最強派閥にまで発展した【ロキ・ファミリア】の幹部格ですら賞賛の言葉しか生まれぬ、ミノタウロスとの戦い。ベル・クラネルはただ必死に戦っていた。

(もっと強く！ もっと速く！)

『ブオオッ!?!』

徐々に加速していくベルの動きに、ミノタウロスは次第についていけなくなっていく。元々、中層のモンスターの中で速さに秀でている訳でもないミノタウロスは、オツタルと戦い続けた強化種と言えどもLv・1トップの速度を誇るベル・クラネルの動きにはついてこれられない。しかし、ベルの臂力では右手に持つ神のナイフでなければミノタウロスに傷をつけることはできず、左手の両刃短剣バゼラードでは薄皮を斬る程度である。だからこそ、ベルはミノタウロスの持つ大剣に目をつけていた。

(あの大剣ならッ！)

ミノタウロスの持つ大剣は、オツタルが使っていた大剣である。決して業物と言えるものではないが、Lv・2相当のミノタウロスにしてみれば十分な武器である。その武器を狙ったベルは、ミノタウロスの死角に入り込んで左手の両刃短剣と右手の神のナイフを持ち変えた。ベルは気が付いていた。目の前のミノタウロスは、ベ

ルが右手に持つ神のナイフだけを防ぼうとしていることを。それは知性がある証拠であり、知性があるのなら裏をかける。裏がかけるのならば思考の空白が生まれる。そこに大きな隙が、存在することを。

「え？」

『——？』

それは【ロキ・ファミリア】のうちの誰かの口から自然と出た疑問符。ミノタウロスの振るった大剣が、右手のナイフを砕き割ったのだ。右手の攻撃だけを警戒していたミノタウロスは、右手にあの黒いナイフが握られていないことに気が付いて、動きが止まった。

持ち変えていた右手の両刃短剣を砕かれたベルは、即座に柄をミノタウロスの顔に投げつけ視界を制限し、そのまま左手に持っていた神のナイフをミノタウロスの右手に突き刺した。

『ヴオオオオオオオッ!?』

「ファイアボルト！」

視界外からの一撃によって右手の感覚を失ったミノタウロスは、続けざまに傷口

へと放たれた炎雷を受けて後ろに倒れ込む。同時に、ベルは神のナイフを手放してミノタウロスの持つていた大剣を手に持つ。大剣を振るうというよりも大剣に振られるような動きを見せながらも、ベル・クラネルは命を刈り取る為に跳躍した。

『ヴ、ヴォオオオオオオオオオオオッ！』

「あああああッ！」

恐怖を振り払うように声を上げる両者は、同時に腕を振るった。ベルが振るった大剣は、ミノタウロスの残っていた片角を斬り飛ばして右肩の半ばまで入り込み、ミノタウロスの左腕は空中を飛んでいたベルの脇腹に叩き込まれた。

「おっと、死んだかな？」

「そんなッ!？」

どちらも明らかに致命傷。冷静にベルが死んだかもしれないと呟くミストの言葉に、アマゾネス姉妹の妹が口元を抑える。

「いや、生きているよ。どっちもね」

ミストの後ろからやってきたフィンは、痛みに悶えながらゆっくりと立ち上がるミノタウロスと、地面に転がりながらゆっくりと動くベルを見つめていた。普通の

冒険者ならもう意識すら失って立ち上がらないような傷を受けていながら、ベルはゆっくりと立ち上がっていた。それでも、痛みに慣れている怪物の方が、起き上がるのは早い。

『ヴォオオオオオオオオオオオッ！』

「ベル様ッ!？」

「チッ!？」

実質的な勝利宣言にも近い咆哮をあげながら、ミノタウロスはベルにとどめの一撃を与えるために拳を叩きつけた。なんとか割って入ろうとするアイズたちよりもミノタウロスの方が早く、無情にも拳は地面に這いつくばるベルに叩きつけられる直前。

「……それでこそだ」

ミノタウロスの拳の衝撃を受け流すようにゆらりと起き上がったベルは、そのまま右肩に刺さっている大剣を手にして、思い切り引いた。

『ヴォオオッ!？ ヴォオオオオオオオオオオオッ!？』

傷口から大量の血をまき散らしながら悶え苦しむミノタウロスに詰め寄ったベル

は、大剣が切り裂いた傷口に手を当てた。

「ファイア、ボルト」

『——ヴッ!?!』

傷口から体内へと炎を受けて、ミノタウロスは口から火を吐く。

「ファイアボルト！」

『ヴォッ!?!』

慌ててベルを止めようと手を伸ばしたところで、もう一度体内へと炎を受けて、身体が不細工に膨れ上がる。

「ファイア、ボルトオオオオオオオオオオッ！」

『——ツッ!?!』

全ての精神をつぎ込んで放たれた最後の炎雷を受けて、ミノタウロスは声なき叫びと共に、胸にある魔石諸共身体を破裂させた。残った下半身が少しずつ灰となつて消えていく中、ベル・クラネルは立ったまま意識を失った。

「……これが、君の言っていた英雄なのかい？」

「少し泥臭いけど、いいんじゃないかな」

ベルのパーティーメンバーであるリルルカや、ベルが急激に強くなったことに騒ぐベートを横目に、フィンはミストへと目を向けた。非常に満足そうに頷いているミストに呆れたような溜息を吐きながら、これは大事になりそうだと今後を憂いた<sup>プレイヤー</sup>勇者は、ベル・クラネルのような真っ直ぐな少年のことを、少し羨ましいと思っていた。

結局、ベル・クラネルは短期間でのミノタウロスの撃破によるレベルアップを成し遂げた。アイズ・ヴァレンシュタインの1年という期間を大幅に短縮する形での世界最速のレベルアップに、オラリオ中が揺れた。その震源地にいる少年。ベル・クラネルは、現在【ヘスティア・ファミリア】のホームで金髪の女性と対峙していた。

「ガルルル！」

「か、神様……失礼ですよ」

「君の神は犬なのか。面白いね」

廃教会の地下室で向かい合うヘスティアとミストに、ベルは溜息を吐きたい気分だった。なにせベルが以前に話していた助けてもらった恩人の1人であると言っただが、それがこんな美女であるとはヘスティアは聞いていないのだ。

「そ、それで……ミストさんはどうしてここに？」

「なに、君がレベルアップしたというからお祝いに」

「あ、ありがとうございます」

実力者として密かに憧れている相手であるミストに、自らの偉業を祝ってもらえることを嬉しく思いながら、彼女の瞳がお祝いに来ただけではないことを語っていることに気が付いているベルは、続きを促した。

「聞けば、ベル君は独学で戦いをしてしていると聞いてね」

「そうですね……ちょっと師事した人はいますけど」

「へん！ 僕のベル君をあんなヴァレン何某に師事させた覚えはないよ！」

「へえ……あの【劍姫】に」

現在遠征中の【ロキ・ファミリア】の幹部であるアイズ・ヴァレンシュタインに師事していた時期があると聞いて、ミストは笑顔を浮かべた。

「よかったら、私にベル君の師匠をやらせてもらえないかと思ってね」

「え？ いいんですか!? 是非お願いしま——はっ!?」

「へー……ふーん……」

ミストから戦闘技術を教われると聞いて興奮した様子の子のベルに対して、横で聞いていたヘスティアの機嫌は一気に急降下した。恐る恐る横にいるヘスティアの方へと視線を向けたベルは、ツインテールが重力に逆らっていることに気が付いて唾を飲んだ。

「じゃあ主神の説得は自分でしてくれ。また日時相談をしよう」

「待ってください！ 助けてえ!?!」

「ベル君！ 君はなんて奴なんだい！ ヴァレン何某だけでなくあんな女までっ

!?! 君は金髪が好きなのかい!?!」

「ひいっ!?!」

背後から聞こえてくる悲鳴を無視して教会の地下室から外に出たミストは、横に現れたラニへと視線を向けた。

「随分と楽しそうだな」

「まあね……魔術や祈禱を教えてもらったことはあったけど、師匠になるのは初めてだから」

狭間の地で駆けずり回っていた頃よりも笑顔が増えたミストに対して、ラニは少し不思議そうな顔をしていた。

「同類も見つけたから、か？」

「オツタルのこと？ あれは同類だけど、私が手を出す意味はないよ……それに、もう高みは示した」

「ならばあの少年か？」

「英雄の器。おそらく神が干渉しているな……それを私が滅茶苦茶にしてみるのも悪くはない」

ベル・クラネルが英雄の器であると感じていたミストだが、ミノタウロスとの戦いを終え、顔を合わせた少年の裏に神の存在がちらついていた。残滓とでも呼べば

いいか、ミストが感じた神の気配はベル・クラネルを見ていた。

「神の英雄などにはさせない。人の英雄にしてやるさ」

「……お前も人のことを言えない神嫌いだと思いがな」

神の計画を崩すことを想像して楽しそうに笑うミストに、ラニは大きな溜息を吐いていた。

ここは英雄たちの集う都オラリオ。神が、英雄が、そして神殺しの王が存在する、迷宮都市である。

---

ベル君がミノタウロスを倒してきりのいいところで一旦、完結とします。

この次の話も構想はあるのですが、時間が取れるかどうか怪しいので書き溜めができたら次を投稿したいと思います。

これまでの読了、応援、設定へのツツコミ、文章改善案、誤字報告、色々とありがとうございました。

更に面白い小説にして帰ってきたいと思えます。

本当に読者の皆様方には感謝しかありません。

ありがとうございます。

# エルデの王は迷宮で夢を見るか？

---

著者 一般通過あせんちゅ

発行日 2023年3月23日

ハーメルン -SS・小説投稿サイト-

<https://syosetu.org/novel/302945/>

本書の内容を無許可で転載・複写・複製することは、禁じられております。

---